

フランツ・グリルパルツァー 『トレドのユダヤ女』 〈五幕悲劇〉

阿部 雄一^{*1} 訳

登場人物¹

アルフォンス善王（八世） カステイリーヤ王²

エレオノーレ・フォン・エングラント その妃

（イングラント王ヘンリー二世の息女）³

王子 ふたりの息子

マンリケ ララ伯爵、カステイリーヤの海軍司令官^{アルミランテ}

ドン・ガルセラン その息子

ドニャ・クララ 王妃の侍女

王妃の女官

イーザク ユダヤ人

エスター その娘

ラーエル 同⁴

レイネーロ 王の小姓

家臣、女官、請願者、従者、一般民衆

物語の場所

トレドとその周辺

時 一九五五年ころ⁵

二〇一六年九月二六日 受理

Franz Grillparzer: *Die Jüdin von Toledo*. Japanische Übersetzung mit einem Nachwort

*1 Yutchi ABE

開智国際大学 リベラルアーツ学部

第一幕

トレドにある王の庭園。

イーザク、ラーエル、エスター登場。

イーザク 止まれ、庭に入るな！ 知らんのか、禁じられてんだぞ。国王がここを散策する時にや、ユダヤ人は——こいつ、いまに神のお仕

置きがあるぞ——ユダヤ人は中に入っちゃならんのだ。

ラーエル （歌う）ラララ。

イーザク 聞こえんか？

ラーエル いえ、聞こえた。

イーザク それでも引き下がらんのか？

ラーエル 聞こえたけど、引き下がらない。

イーザク はてはて、神はなんでわしをお苦しめになることか。貧しい者に金も恵んだ、お祈りも断食もした、禁断の味も我慢して知らんでいるつてのに、はてはて、それなのに神に苦しめられるつてのか。

ラーエル （エスターに）まあ、なんで腕を引っ張んの？ あたしはここにいるの、帰らないよ。王さま見たいんだから、宮廷とかその人たちの感じも、金細工や装身具も。お殿さまは肌が白くて血の気かよつてて、若くて美男子でなくちゃ。あたし、見たいの。

イーザク 手下に捕まったら？

ラーエル まあ、頼んで放してもらおう。

イーザク まったく、母親と同じだ。だろ？ あいつもきざなキリスト教徒に色目使ったり、エジプトの肉鍋食いたがったりした。厳しく見張ってないと、——神がお赦しになりますように！——おまえの愚かさは母親ゆずりで、汚らわしいキリスト教徒の血引いてるって思っちゃまうところだ。それに引き換え、最初の女房は、(エステルに向かつて)おまえのかあさんは、おまえ同様けなげで、貧しかったが褒めてやりたい。後添えの富が何の役に立ったってんだ。その金使い放題使って、連日連夜宴会騒ぎ、宝石やら何やら買いあさってた。見ろ、まったく、この子はあいつの娘だ。あちこちいろいろぶらさげおって、これ見よがしの服を着おって、まるでバベルの町。みたいじゃないか。

ラーエル (歌う) あたし、きれいでしょ？

あたし、お金持ちでしょ？

みんな、怒ってる。

でも、気にしない。ララララ。

イーザク 高価な靴履きおって。履きつぶしたって平気だ。一歩歩きたびに三文だ。耳にや高い耳飾り。泥棒が来て盗ってって、藪の中にでも落としまつたら、誰が見つけられるってんだ。

ラーエル (耳飾りをはずして) 見て、このネジはずして、手に取るの。

このきらきらしてること！ でもあたしはあんまり気にかけない。気が向いたらあげるね。(エステルに) それより、ぼいって投げちゃおう。

そらっ！ (手で遠くに投げる身ぶりをする)

イーザク (その身振りの方向に走って行き) うわあ、うわあ、どこに飛んでった。うわあ、うわあ、どうすりや見つかる。(藪の中を捜す)

エステル まあ、どうしちやったの。アクセサリーを——

ラーエル あたしがそんなにばかで、金目のもの投げたなんて思ってるの？ 見て、ちゃんと手の中よ。白くてかわいいのを耳にもう一度かけて、ほつぺたを飾ってもらおう。

イーザク (捜しながら) うわあ、ないぞ。

ラーエル どうさん、来て。見て、アクセサリー見つかったよ。ほんの冗談だったんだよ。

イーザク ばち当たるぞ——！ 悪い冗談を！ さあ来い。

ラーエル どうさん、ほかのことは何でも言うこと聞くけど、でも行くのだけはだめ。王さまを見なくちゃ。それにあたしも王さまに、そうあたしも見てもらわなくちゃ。王さまがやって来て、こう訊くの、そこな美しきユダヤの女は何者ぞ。名をなのれ。——あたしは答える。

ラーエル、イーザクの娘ラーエルと申します。すると王さまはあたしのほつぺたを軽くつねって、ならば美しきラーエルと呼ぼうって。それでみんなの嫉妬が破裂したってどうよ。みんなが怒ったって、あたし知らないわよ。

エステル どうさん。

イーザク 何だ？

エステル あつちのほう、人が近よって来るよ。

イーザク うへえ、何てこった。敵将レハーベアムとその民だ。行かないのか。

ラーエル どうさん、聞いて。

イーザク ならここにいろ。エステル、来い。このばかは置き去りだ。不浄の手の民が来てこいつに触って殺しやあいい。自分から望んだことだもんな。エステル、来い。

ラーエル うわあ、どうさん、行かないで。

イーザク 勝手にやつてろ。さあ、エスター、来い。(退場)

ラーエル ひとりになりたくない。聞いてんの？ 行かないで！——行ってしまった——ああ、何てことかしら。ひとりになりたくない。聞いてんの？ ああ、人が来る。——ねえさん！ とうさん！（二人の後を急いで追う）

王、王妃、マンリケ・デ・ララおよび従者たち登場。

王 (登場して) 民をもっと近づけよ。構わん。わたしを王と呼ぶ者は、大勢の中からわたしを最高権力者と認めているのだから、民はわたしの体の一部なのだ。

(王妃に向かって) わたしの大切な半身よ、古い壁に囲まれたこの忠誠の町トレドによくこそ。周りを見渡し、胸をはずませてくれ。ここがわが心の揺籃の地なのだ。ここにあるものは、広場にも建物にも石にも木にも、どれを取っても子供だったころのわたしの運命が刻まれている。父もなく、母をも早く奪われた幼いわたしは、あのレオン国王、よこしまな叔父の怒りに追われて、敵のものとなった自分の国を逃げ回ったが、カステイリヤの民は、盗びとが盗んだものを扱うようにして、わたしを町から町へ連れて回った。というのも招くほうも招かれるほうも等しく死神に脅かされていたし、わたしの足跡はどこに行っても嗅ぎつけられたからだ。そこで、わたしをここへ、敵の権力の中核がすすわっているこの町へ連れて来た男たちがいた。涼しい草葉の陰に隠れて久しいドン・エステバン・イランとこのララ伯爵マンリケだ。そしてわたしを、ほかの建物に抜きん出ている、あの聖口

マン教会の塔にかくまった。あそこでわたしはじつと静かにしていたが、男たちはうわさの種を民衆の耳にばら撒いた。昇天祭の日になって人々が教会の門前に集まった時、彼らはわたしを塔の張り出し窓に連れて行き、群衆にわたしの姿を見せ、こう叫んだ。おまえたちの真つ只中におわすこのおかたこそ、おまえたちの王である。かつてのご領主さまがたのお世継ぎにして、お家の権利とおまえたちの権利を喜んで守護するおかたなるぞ。わたしは子供で、泣いていたと聞いている。だが今なおあの耳をつんざく叫び声、幾千もの髭づらのどくびが発したたつたひとつの言葉が聞こえてくる。それに幾千もの剣が民のたつたひとつの手に握られているようだった。しかしその子供に神は勝利を与えてくださり、レオン軍は地の果てまでも逃げて行った。わたし自身はまだ戦士というより旗がわりだったが、軍隊の中心に立ち、国中を進軍して口元に笑みを浮かべながら勝利をもぎ取っていた。だが、わたしは皆の者に教えられ面倒を見てもらいました。わたしが飲む母乳は彼らの傷口から流れ出たものだった。それゆえ、よその領主たちが民の父と言われるとしたら、わたしは自分のことを民の息子と呼ぼう。というのも、わたしがいまこうしていられるのは、彼らの忠誠あつてのものだからだ。

マンリケ いとも気高きご主君がいまこうしておられることが、ひとえにわれわれの行動と言葉の結実によるものでありますなら、感謝のお気持ちを頂戴し、喜ぶことといたしましょう。われわれの教育とお世話がかくも大いなる名誉と数多の武勇となつて返つて来るなら、感謝されることもやはり大切な務めでございます。

(王妃に) このおかたをごらんください。と申しますのも、かつてスペインにどれほど多くの国王がいたとしましても、お心ばえの高さで

このおかたに匹敵する王はいなかったからでございます。年を取ると通常は咎めだてしたくなるもので、わたくしも年老いてからというものが、好んで何かとぐつぐつ申します。ところが、わたくしが意見しましてもこのおかたにあつては、領主にふさわしい気高いお言葉に負かされるのもしばしばでして、ひそかに腹を立て——と申しましてもほんの一時いつときですが——主君に対してあら捜しをし、どれほど嬉々として過ちを責め立てたこととでございましょう。しかしいつも深く恥じ入って退散したものです。わたくしは妬みしました、このおかたにはしみひとつなかつたのです。

王 おいおい、ララ、師匠が追従か。だが、あれこれ揚げ足を取るのによそう。わたしが厄介者でないなら、それはおまえたちにも都合だからな。もつとも、ほんとうに欠点がない人間というものは、えてして優れたところもないのではと思つてしまふが。というのも、たとえば樹木というものは、光から遠く離れている根によつて、濁つた養分などを地中深くから吸い上げるからだ。同様に、幹は叡智と呼ばれ、太い枝が伸びて大空に相応しいものになるために、欠点といつてもよいかげられた地面の下から力と存在の根源を吸い上げてゐるらしいからだ。厳しかったことのない者が正義だったためしがあるだろうか。温厚な者には、たいていは弱点があるものだ。勇者は戦場に出れば向こう見ずになる。打ち負かされてしまふ欠点も皆、人間としては美德だ。諍いがなければ権力も存在しない。わたし自身には時間の無駄遣いは許されなかつた。子供の時にはや、弱々しい頭に兜をかぶり、青年になると槍を持つて馬上高い人となり、敵の脅威には目を向けていたが、この世の財宝には目もくれなかつた。刺激し誘惑するものは遠く未知のものだった。女というものが存在することを初めて知つたのは、わ

が妻を教会で娶らされた時だった。その人は、そんな人がいるとすればだが、まさに欠点のない人で、時には褒め言葉以外も言つてよければ、正直に打ち明けるが、わたしがもつと暖かく愛せるはずの人なのだ。

(王妃に) 驚かないでくれ。ほんの冗談なのだから。だが、何が起るかは分からないもの、わざわざ悪魔を呼び出したりはするまい。

しかしさて、口論するのはやめて、わずかに許された時間を寛ごうではないか。国内にくすぶる反目は和らいできた。だが聞くところでは、ムーア人が新たに戦闘の準備をし始めている。アフリカからベン・ユスフとその戦い慣れた援軍が来るのを待っているという。つまり新たな戦と新たな苦しみが始まるのだ。その時が来るまで、平和を喜び、常ならぬ空気を吸い込むとしよう。知らせはないか？——いやひとつ、忘れていたことがあつたな。エレオノーレ、周りを見回してくれないか。そなたを喜ばせようとしてわたしたちが造つたものが見えるだろうか？

王妃 何を見たらよいのでしょうか？

王 何と云うことだ、海軍司令官アレミランテ(マンリケのこと)。われわれの努力も無益だった。何日も何週間も土を掘り返しては、オレンジの実ばかりつけ木陰を与えてくれるこの庭を、わが厳格な妻の厳格な祖国イングランドが保護し、愛しているような庭に造り変えようと思つたのだ。だが、彼女はほほえんで、そつと首を振っている。——まったく、ブリテン人というのは皆こうだ。慣れ親しんだ習慣と髪の毛一本違つているだけで拒絶して、たおやかにほほえむのだ。エレオノーレ、少なくとも狙いは良かったのだから、われわれのために何日か分からないほどよくやつてくれた男たちにねぎらいの言葉をかけてやつてくれ。

王妃 気高いかたがた、感謝します。

王 さあ、話を変えよう。きょうという日に罅ひびが入ってしまった。それには他にもイングランド風の小屋や草原、庭のあれこれを見せたいと思っていたが、見込み違った。いや、無理をせずともよい。そういうことだ、もうこのことは考えまい。——だが、スペイン・ワインがスペイン料理を引き立てられるまで、仕事の時間が一時間ほど残っている。国境からの使いの者はまだ来ないのか？ ことさらトレドを選んだのは、敵の情報に近づこうとしてのことだったのに、使いの者がまだとは？

マンリケ 殿——

王 何だ。どうした。

マンリケ 使いの者は参っております。

王 ならば早く。

マンリケ (王妃を指して) しばらくお待ちを。

王 わが妻なら会議や戦に慣れている。王妃は如何なることも王と分かち合うのだ。

マンリケ ですが知らせ以外のことが使いの者自身には——

王 その使いとは？

マンリケ 倅でございます。

王 ああ、ガルセランか。ともかく来させよ。

(王妃に) ここにいてくれ。あの若い男は、愛しい人の様子を探るために変装して女官の部屋に忍び込むという大変な罪を犯した。まあ、ドニヤ・クララ、うなだれずともよい。あの男は若くて性急だが、勇敢だし、わたしの幼なじみだ。歩み寄ろうとしない態度は、軽率に過ちを見過ごすよりなおまずいだらう。何か月も遠い国境に追いやられ

て、十分に償いもしたと思う。(王妃の合図で、女官のひとりが退去する) それでも行かせてしまうのか。何たる淑やかさ、純潔以上に純潔だ。

(ガルセラン、登場) ああ、友よ。向こうの様子はどうか。あちらの者たちは皆、おまえのように、つまり娘のようにおどおどしているのか。だとしたらわが王国の防衛態勢は良くないということになるな。

ガルセラン 殿、勇敢な男は敵を恐れませんが、貴婦人の正当な怒りにはつらいものがあります。

王 正当な怒りとな、そうとも！ わたしが妃ほどしきたりや礼儀に厳格でも本気でもないなどと思うな。だが、怒りにせよ何にせよ限度はある。それでガルセラン、もう一度訊くが、向こうの様子はどうか。平和ではあるが、敵に苦しめられているのではないか。

ガルセラン 殿、敵も味方もあちこちで打ち合っては傷つき血を流しましたが、その闘い方たるや見せかけだけのようでした。今の平和は戦争と紙一重です。背信行為があるかないかの違いのみです。しかしこしばらくの間、敵は平穩を保っています。

王 おお、まずいな。

ガルセラン われわれもそう思い、もっと大きい攻撃を準備しているのだと考えております。また噂では船で毎日、人員と物資がアフリカからカデイスに搬送されている、カデイスではひそかに立派な一軍団が組織され、そこにモロッコの新しい支配者ユッスフがかの地で獲得した民兵を合流させる、そうしておいて、わが軍をおびやかす攻撃を仕掛けてくるのだらうと言われております。

王 さて、向こうが攻撃してきたら、こちらでも攻撃し返すさ。向こうは向こうの王が率いるように、おまえたちはおまえたちの王が率いるの

だ。そして神なるものが現に存在するとおり、王の口が毅然として発する言葉が正義であるなら、わたしは勝利を望もう。なぜなら正義だからであり、神が存在するからである。かの地の民が苦境に陥っているのが無念だ。わたし自身が、最高指令官として一番の重荷を背負うぞ。民を教会に集め、勝利を与えてくださる主に祈願するように伝えよ。護符が配布されるから、これから戦う者は祈れど。

ガルセラ 呼びかけなくとも、殿のお言葉ははや実現されており、鐘の音は遠く国境まで鳴り渡り、あちこちの寺院に民が集まって行きます。ただ、よくあることですが、誤って彼らの怒りの矛先は、国内の商売と利益を吹き消した異教徒のユダヤ人に向けられております。すでにあちこちで虐待がありました。

王 しておまえたちは黙って見ているのか？ 偉大なる神に誓って、わたしに身を任せる者は護ってみせる。おのれの信仰に彼らは心を砕くがよい、だが、わたしは彼らの行いに心を砕く。

ガルセラ 彼らはムーア人に金で雇われたスパイだと言われております。

王 誰にせよ結局は、自分の与り知らぬことを漏らすことはない。わたしはいつも彼らの金を軽蔑してきたから、未だ彼らの助言を所望したこともない。これから起こることを知っているのはわたしばかりであり、キリスト教徒でもユダヤ教徒でもない¹⁰。ゆえにおまえたちの首にかけて言おう――

ひとりの女の声 (舞台の外から) わあ！

王 何だ。

ガルセラ 殿、あれを、ユダヤ人らしき老人です。庭番に追いたたられております。そのわきに若い女がふたり。ごらんください、ひとり

がこちらに逃げてまいります。

王 それは正しい。ここに来れば保護されるからな。あの女の髪一本でも曲げる者には神の雷^{いかずち}だ。(舞台の袖に向かつて) こっちだ、こっちへ来い。

(ラーエル、逃げてくる)

ラーエル 助けて、みんなしてあたしを殺そうとして。あそこでどうさんも。誰も助けてくれないの。

(王妃を見てその前にひざまずく) おお、優しいおかたさま、おかくまいください。御手を差し出されて、婢^{はしため}をお護りください。お仕えいたします、ユダヤ人でなく奴隷として。

(手を王妃の手のほうに伸ばすが、王妃は彼女に背を向ける)

ラーエル (立ち上がって) ここにも救いはない。どこもみな不安と死ばかり。どこに逃げればいいのかしら。

ああ、こつちに男のかた、目に月の光のような慰めと涼やかさをたたえていらつしやる。周りから漂って来るものは皆このかたを陛下だと言っている。殿さま、お護りくださいませ、ああ、殿さまならきつと。死にたくないのです、死にたくない、いやです、いやです。

(ラーエル、王の前に身を投げ出し、彼の右足を抱え込み、ぬかずく)

王 (数人の者が近づいて来るので) この女に構うな。シヨックでわけが分からなくなっている。わたしも同様にぞくつと衝撃を受けてしまった。

ラーエル (身を起こして) あたしの持っているものならみんな、(腕輪をはずして) この腕輪も、首飾りもこの高価なスカーフも、(首にシヨールのように巻きつけていたスカーフをはずし) 父が四十ポンドで買ってくれた純インド製の織物、差し上げます。あたしの命だけはお赦

しを、死にたくないのです。(くずおれて先ほどまでの姿勢に戻る)

(イーザクとエスター、連れられて来る)

王 この男は何の罪を犯した。

マンリケ (皆が黙っているので) 殿もご存じのとおり、この庭園は宮中のかたがたがお通りの際には、ユダヤの民の入場が禁じられております。

王 そうか、禁じられているなら、わたしが許可しよう。

エスター 殿さま、この者はスパイではありません。商人です。所持している手紙はヘブライ語でして、ムーア人の使うアラビア語ではありません。

王 分かった、分かった。(ラーエルを指して) この女は？

エスター あたしの妹です。

王 ならば引き取って、連れて行け。

ラーエル (エスターが近づいて来るので) いや、いや、捕まえられて引きずり出されて殺されるわ。(はずした装飾品を指さして) これが身代金です。ここにいて楽に息をしたいと思います。(頬を王の膝に当てて) ここが安心、ここなら落ち着いていられます。

王妃 いらっしゃいませんか？

王 見てのとおり、捕まえられてしまったよ。

王妃 捕まえられたのですか。わたくしは自由の身ですから参ります。

(女官たちとともに退場)

王 おまけにこれだ。女というものは淑やかにしているが、それゆえに来てほしくないものを招きよせてしまう。

(ラーエルに厳しく) 立てと言っている。——この女にスカーフを渡し、て帰らせろ。

ラーエル おお、殿さま、もうほんのしばらく——手足が萎えてしまいました——しっかり歩くことができませぬ。(片肘を膝に当て、頭をその手で支える格好をする¹²⁾)

王 (後ろに下がって) この娘はいつもこんなに怖がりなのか。

エスター いえ、そんなことはございませぬ。つい先ほどまではしゃぎ回って、言うことを聞かず、殿さまに会うのだと申しおりました。

王 わたしに会うだと？ ずいぶん高くついたな。

エスター ふだん、うちでは冗談ばかり言つて、「人間と犬」ごっこをやつては、あたしたちがどんなに真面目になつても笑わせてしまうような子です。

王 ならば、この者がキリスト教徒で、退屈でたまらないこの宮中にいてくれればよかったのだがな。ほんの少し冗談があればわれわれに益することもあるうに。おい、ガルセラン。

ガルセラン 陛下。

エスター (ラーエルの面倒をみて) 立って、立って。

ラーエル (起き上がり、エスターの首飾りはずし、他のものと一緒にする) ねえさんが持つてるものをちょうだい。あたしの身代金にする。

エスター いいわよ。

王 これを見てどう思う？

ガルセラン わたくしがですか？

王 分からぬふりをするな。おまえは色の道に通じているのだ。わたしはあまり女を気にかけたことがなかったがな、この女、美しく見えるのだ。

ガルセラン 事実、美しくうございませぬ。

王 ならば心を強く持て。おまえが護衛するのだから。

ラーエル (舞台中央で膝をかくがくさせ、うなだれて立っている。袖をまくり上げて) 腕輪つけて。——いたっ。締めつけないで。首飾りも——まだここにかかっていたのね。スカーフは持つてて。息苦しくて蒸し暑いから。

王 家まで送って行け。

ガルセラン ですが、殿、心配です。

王 何が。

ガルセラン 民が興奮しておりまして——

王 それは間違いではない。王の一言で保護は十分ではあるが、暴動のどんな些細なきっかけも与えないようにするほうがよからう。

エステル (ラーエルの服の襟首のあたりをきちんとしてやりながら)

この服のずれて破れていることしたら¹³。

王 まずは、庭のあちこちにある園亭のどれかに連れてゆけ。そして夜になつたら——

ガルセラン どうしろうと？

王 何だ？ ああそうだった。おまえたち、まだ終わらんのか。

エステル 終わりました、殿さま。

王 夜になり、民がいなくなつたら、家まで送ってゆけ。それでよい。

ガルセラン 来い、美しい異教徒。

王 異教徒だと、何をばかな！

エステル (立ち去ろうとするラーエルに) こんなに良くしていただいたのに、殿さまにお礼も言わないの？

ラーエル (未だにぐったりしているが、王のほうに向き直つて) 殿さま、力強くお護りくださり、有難うございました。ああ、あたしがこ

んなに惨めな生き物でなかったら。(首に手を当てる身ぶり) こんな首首切り役人に切られてしまえば。この胸が殿さまの敵に対する楯になれば——そんなもの、お望みではないでしょうが。

王 美しい楯だな。さあ、神とともに参れ。それに——ガルセラン、(小声で) わたしは望まないのだ、保護してやったこの女が、何か無遠慮で好き勝手な戯れ言に侮辱されるとか、いやな思いをするとか——

ラーエル (手を額に当て) 歩けないわ。

王 (ガルセランが彼女に腕を貸そうとするので) なぜ腕を？ 姉に連れて行かせろ。

おい、老人、娘を大事にしる。世の中は悪意のあるもの。宝を護れ。(ラーエルとその家族、ガルセランに伴われて退場)

王 (彼らを見送りながら) 相変わらずよろめいている。あの女のありようときたらまったく、新しい波が次々押し寄せる不安の海だ。

(足を一步踏み出して) この足は痛みを感じるほどきつくしがみつかれた。——そもそも不思議なこともあるものだ。臆病な男なら軽蔑されても当然だ。だが、女というものは、弱いからこそ強いだからな。

ああ、アルミランテ、おまえならどう思う？

マンリケ 殿、思いますに、殿は倅を厳しく、同時に優しく罰せられました。

王 罰した？

マンリケ あの賤民の護衛役をお与えになったことです。

王 その罰はそうきついものではないと思うぞ。わたし自身は女というものをたいして気にかけたこともないし、(家臣たちを指して) だが、この面々はもしやほかのことを考えているのかも知れんな。

ともかくこのもつれた思いはうちやっつてしまおう！ 食卓に向かお

う。元氣をつけたくなってきた。この喜ばしい祝いの日に飲む最初の一杯の時には皆、思いをはせてくれ——おのおのが思いたいことを¹⁴。ここでは身分の上下はなしだ！ さあさあ！ 進め！ 前へ！
 (廷臣たちが両側に並び、その中央を王が退場するうちに、幕が降りる)

第二幕

庭園の一部。幕で仕切って奥行きを浅くした舞台面。上手に園亭。バルコニーと扉があり、その扉にいたる階段が数段ある。
 ガルセラン、扉から出てくる。

ガルセラン これではばらく逃げていられるな。あの娘、美しいがばかだ。恋は愚かなものだから、愚かな女はどんなにずる賢い女にもまして危険だ。

おまけに、ドニヤ・クララ——無口な女の中でもひときわ心を明かさな人だから——改めておれの評判とあの人への熱い想いの実あるところを見せなくては、そうする時間はまだあるからな。賢者は危険から逃れることを勝利と呼ぶのだ。

(王の小姓、登場)

小姓 ガルセランさま。

ガルセラン ああ、ロベルト。何の用だ。

小姓 国王陛下から、かくまっている者と閣下がなおここにおいでか様子を見て来いと、命を受けました。

ガルセラン われらがなおここに？ 殿が命じられたことなのに——ああそうか、おれが上にいるかどうか見て来いと言われたのだな。ならば娘は園亭の中で、おれは外だと伝えよ。それだけ言えば十分だろう。

小姓 陛下ご自身がおいでです。

ガルセラン ああ陛下！

(王、登場。マントを着ている。小姓、退場)

王 はて、まだここにいたか。

ガルセラン 陛下ご自身が命じられたことではありませんか、夜の闇を待つて——

王 そうとも、そうとも！ だがよくよく考えてみれば、明るいうちに出發するほうがよさそうにも思える——おまえは勇敢だと評判だし。

ガルセラン では陛下のお考えになつてゐるのは——

王 おまえが王の言葉を尊重してくれているということだ。だが、わたしに保護した者が面倒なことにならないようにしてくれ。ただし、慣れは人間を手懐けてしまうもの。しかもわれわれの意志にしても、しなければならぬからするつもりになることがよくある。であるから、いま出發せよ。だが、おまえの庇護の者はどうしている？

ガルセラン 初めは際限もなく泣きっぱなしでした。しかしよく言われるように、時がたつと慰められるもので、この度も同じく、初めの衝撃が過ぎると元気が出て、冗談までまた出るようになりました。それから今度はいろいろな道具を見たり、絹の絨緞を讃嘆したり、カーテンの布地を腕の長さで測つたり、その場に慣れるにつれて、落ち着いてきました。

王 家に帰りがつてゐる様子か。

ガルセラン そうでもありません、またそうでないようでもあります。ですが、心の軽い者は先回りして悲觀的にならないものです。

王 おまえはいつもの癖で、きつとうまい言葉の餌をあの人に投げかけたのだからな。女は食らいついたか。

ガルセラン 殿、わたしはそんなに悪くはございません。

王 嘘をつくな。——そもそもおまえは幸せ者だ、まったく。鳥のように朗らかな空を浮遊しては、甘い果実が誘うところに降りて行き、ひと目でどうすればよいのか分かつてしまふ。わたしは王だから言葉で

人を驚かせはするが、初めて見る女と向かい合つたりしようものなら、わたしのほうが勝手にどぎまぎしてしまふだろう。おまえはどうやって事を始めるのだ？ 少し教えろ。この道に関しては奥手で、なりだけ大きい子供でしかないのだから。溜め息をつくのか？

ガルセラン うはつ、それは時代遅れです。

王 それでは、見つめるのか？ ガチョウ王子は見つめるのか、ガチョウ婦人が見つめ返してくれるまで？ そうではないのか？ それからおまえはリュートを手にとつて、ここのようなバルコニーに向かつてガアガア歌つて聞かせるのだろう。それに加えて、青白い女衞の月が木々の間を縫つてきらめく。花の香りは甘く酔わせる。そしてついにお謎え向きの時が来て、女の父や兄や——ことによると夫が家を出て同じ道を通つて行つてしまふ。すると侍女がひそやかに「しっ！」と目配せする。そこでおまえが中に入ると、暖かい手がおまえの手を握り、いくつもの回廊を導いて行く。回廊は墓のように暗く、どこまでも伸びてゐることで、願望を高めさせ、やつとのこと、竜涎香アムルの薫りと隙間から漏れ出る青白いほのかな光で、愛しい目的の場所に着いたことが分かるのだ。扉が開く。蠟燭の灯りにうつすら照らされ、暗い色のピロードの上に手足をゆつたり伸ばし、白い腕には真珠の飾り紐を巻きつけ、いとしい人は軽くうなだれるように首をかしげ、よりかなり、金の巻き毛は——いや、黒髪だ！——濡れ羽色の髪は——などなど！ どうだ、ガルセラン、のみこみが早いだろう。こういうことではどの女でも同じだな、キリスト教の女もムーアの女も——ユダヤの女も。

ガルセラン 国境の戦士であるわたしたちがムーアの女に目移りしても当然でしょうが、ユダヤの女は——

王 たまにはいかも、食いもやってみろ。賭けてもいいが、上の女がおまえにひと目でも投げかけて見せていたら、いまごろおまえは燃え上がっているだろう。わたし自身はあの民を愛していないが、彼らを醜くしているのはわれわれの仕業だ。われわれは彼らを足萎えにしておきながら、彼らが足を引きずると憎むのだ。しかもあの一所不住の羊飼いの種族には、ガルセラン、得体の知れない大きなものがある。彼らと違ってわたしたちはきょう生まれたようなものだが、彼らの来歴をたどれば天地創造の揺りかごにまで行きついてしまう。そのときは、神がまだ人間同様に樂園を歩き、智天使^{ケルビム}が太祖たちに招かれ、唯一神が裁く人であり正義であった。あれこれのメルヒエン世界も含めて、真実の物語もある。たとえばカインとアベル、賢いレベッカ、労働奉仕してラーエルに求婚したヤーコブ——あの子、名は何という？

ガルセラン 存じません。

王 うむ。王笏をエスターの頭上に向けたアハスヴェールス。エスターはその妻になったが自らはユダヤ人、その民の守護神になった。キリスト教徒もイスラム教徒も系譜をずっと遡っていけば、最古にして最初の種族であるこの民に行き当たるのだから、われわれが彼らを信じないのではなく、彼らがわれわれを信じないのだ。だがその民はエサウのようにして、おのれの正義を失ってしまった。われわれは罪と過ちで主を十字架に毎日十回もかけてしまうのに、彼らはただの一回だけだった。

さあもう行こう。というより、おまえは残れ。護衛をし、その家を覚えておけ。もしかしたら少しばかり心配ごとが気になって、一度訪ねて行き、感謝されるかもしれない。(行こうとしたその時に建物の中の騒ぎが聞こえ、立ち止まる) 何をしているのだ。

ガルセラン 中で騒いでいるのです。どうやら彼女たちは殿のお褒めのお言葉が嘘だと分かって、言い争っているのです。

王 (建物のほうに歩いて行き) 何を争うことがあるのだろう。

(イーザク、園亭から出て来る)

イーザク (やって来たほうにふり返って) もういい、そこでそうしておまえたちの首を賭ける！ もう、一度はそうなりかけたんだ。おれはよけるぜ。

王 どうしたのか訊け。

ガルセラン おい、どういうことだ。

イーザク (ガルセランに) ああ、われわれをお護りくださる殿でしたか。娘のラーエル¹⁵が殿のことをいろいろ話します。殿のことが好きなのです。

王 本題に入れ。下らんおしゃべりだ——

イーザク このおかたはどなたで？

ガルセラン どうでもよいことだ。話すのはおまえだ。なぜ上であのよう騒いでいるのだ。

イーザク (窓から上に向かって話す) いいか、いまにひどい目に遭うからな。待ってろ。

(ガルセランに) わしのラーエル¹⁵を殿ご自身、ご覧になったでしょう。泣いてうめいて、胸をたたいて、半狂乱の態を。いやそれでも、わしの命です！ 危険が過ぎ去ったと知るや、元のお転婆が戻って来たのです。改めて笑ったり、踊ったり、歌ったりで半分気が触れたようです。死神に見張られている神聖な道具を動かしたり、ガシャガシャ音を立てたり——お聞きのとおりです。ベルトに鍵束をぶら下げておりましたでしょう？ それをいちいちどれが合うか部屋中の衣

装棚に挿し込んでみて開けているのです。そこにはあらゆる種類の衣装が掛かっています。乞食とか王さまとか天使とか悪魔とか、男物も女物も。

王（ガルセランに小声で）この前の謝肉祭劇のものだ。

イーザク あの子は羽飾りのある王冠を選びました——金ではなく金メッキしたブリキです。重さで分かります。二十ヘラー相当でしょう——肩にお引きずりの衣装をまとって、あたしは王妃だ、などとやっています。（ふり返って）そうだ、ばか。

とどのつまりは——隣の部屋に王さまの、神よ、王を護りたまえ、われらが主君の絵が掛かっていました。それをあいつは壁から取りはずして担ぎまわして、あたしの夫だとか甘い言葉で話しかけたり、胸に押し当てたりしていました。

（王、強い足どりで園亭に向かって行く）

ガルセラン 陛下！

イーザク（引き下がって）うへっ！

王（階段の上に立ち、落ち着いた声で）その悪ふざけ、間近で見たいもの。おまけにおまえたちの帰る時も近づいてきた。好機を逃したくない。老人、来い。わたしはひとりで、見張りもなしにおまえの子供らに近づこうとは思わないから。（園亭に入る）

イーザク 王さまだっただのですか。何たること！

ガルセラン さっさと入れ。

イーザク 王さまが刀を抜いたら、わしらはみな処刑されちまいます。

ガルセラン ともかく行け。怖いことというなら、おれが恐れているのはおまえの娘のことでもおまえのことでもない。（ためらっているイーザクを扉から中に押しやり、そのあとに行く。二人とも退場）

園亭の中の広間。下手後方に扉、上手前方にもうひとつの扉。

ラーエル、頭に羽飾りのある王冠をかぶり、肩に金の刺繍のあるマントを羽織っている。いま、肘掛け椅子を上手の脇部屋から引っぱり出そうと懸命である。エスターが出入口から入って来る。

ラーエル 肘掛け椅子をこっちに、真ん中に。

エスター 何やってるの、ラーエル、用心しなさい。そういうお転婆やっていると、あたしたち、不幸のどん底に突き落とされるわよ。

ラーエル 王さまがこのうち貸してくれたんだもん。ここにいる間はあたしたちのものよ。（ふたりに椅子を中央に持つてくる）

ラーエル（自分の姿をためつすがめつして）あたしの長裾、どう？ 似合ってるでしょ。あたしがお辞儀するとこの羽根もお辞儀するし。足りないのはもうひとつだけ。待つて、取ってくるから。（脇扉の中に戻って行く）

エスター ああ、ここを離れて、うちに帰っていられたら。妹に追っばらわれて、とうさんもどこかに行っちゃうし。

ラーエル（額のない絵を持って戻って来て）ほら、王さまの絵よ。額からはずしてきた。これ、持つて帰るわ。

エスター またそんなばかなこと、しちゃうわけ？ 何度、注意すればいいのかしら。

ラーエル あたしが姉さんの言うこと聞いたことある？

エスター 神かけて、ないわね。

ラーエル 今回もそうよ。この絵、気に入ったわ。ほら、素敵でしょ？

部屋のベッドのすぐ横に貼るのよ。朝な夕なにこれを眺めるの。そうして思い浮かべるの、服の重みを振り捨てて、いやな圧迫感からすっかり解放されたと感じる時に人が思うこと¹⁶。でも盗んだなんて思われたくない。——あたしにはお金があつて、盗む必要なんてないんだから。——ねえさんが首に掛けてるペンダントのあたしの絵、この絵があつたところに掛けたらどうかしら。これを王さまに見てもらつて、王さまの絵はあたしが見るの。あたしのこと忘れたら、思い出してもらおう。腰掛をこつちにちようだい。あたしがお妃さまよ。この王さまを椅子にピンで留めよう。愛を無理強いする魔女は針で蠟人形を刺すつていうわね。一刺し一刺しが心臓まで達して、ほんとに生きてる命を生かしても殺しもするんだつて。(絵を椅子の背凭れに、四隅に針を刺して、固定する) 刺す度に血が出るなら、あたしは渴いた唇でそれをすすつて、あたしが招いた禍を喜びたいわ。

さあ絵はここにつけた。きれいだし、何も言わない。けれどあたしは、あたしを着飾るマントと王冠をつけた妃となつて話しかけよう。(腰掛に座り、王の絵のほうを向いて) 名誉というものをお忘れになつたあなた、信心は深くあらせられませ。そうなさつていらしても、あなたさまの手練手管は逐一よく存じております。あのユダヤ女がお気に召したのでございますね。違ふとおっしゃつてごらんなさい。わたくしの言葉で誓つて、わたくし自身と比べてみても、あの女は美しい。

(王、ガルセランとイーザクにつき従われて入ってくる。椅子の後ろに立ち、両腕を背凭れに置き、ラーエルを見つめる)

ラーエル (続けて) わたくしはあなたの妃、耐えられません。いたちのように嫉妬深いのですから。お黙りになつたままですか？ それで

は罪が増すばかりでございますよ。白状なさいませ、あの女が気に入つたと。そうだとおっしゃいませ。

王 まあ、そうだ。

(ラーエル、縮み上がった絵のほうを見、それから目を上げて王を認めるが、腰掛にじつと動かずにいる)

王 (前に歩み出て) 驚かせたか？ おまえが望んだから言つたまでだ。

うろたえるな。敵の手に落ちたのではないのだから。

(彼女に手を差し伸べると、彼女はさつと腰掛から飛びのき、上手の扉のところへ逃れ、深く息をつき、うなだれて立ちつくす)

王 妹はこんなに内気なのか。

エステル いつもそうとは限りません。内気なのではなく、臆病なだけです。

王 わたしはひどいことをしたか？ (ラーエルに近づく)

(ラーエル、首を激しく横に振る)

王 ならばしつかりしろ、いい子だから。よし、もう一度言おう。おまえが気に入つたぞ。わが名誉と義務がわたしを呼んでいるこの度の聖戦から戻り、トレドに来ることがあれば、おまえの消息を尋ねるかも知れん。住まいはどこだ？

イーザク (すばやく) ユダヤ通りのベン・マーテス・ハウスです。

エステル その前に追い払われていなければですが。

王 それは請合おう。わたしが保護を約束したからには保護してやる。そしておまえがその時も、今のように内気でなく、さきほどのようにおしやべりで家族と機嫌よくしているなら、わたしも一時間でもおしやべりに興じて、宮中のいざこざを逃れて一息つくことだろう。しかし、もう時間だから行きなさい。ガルセラン、送つてやれ。だが、そ

の前にまずその絵を元の場所に戻すのだ。

ラーエル (椅子のほうに駆けよつて) これはあたしのもんです。

王 ばかなことを。おまえがはずした額の中に戻せ。

ラーエル (ガルセランに) 針に触らないでください、絵にも。触つたらもつと深く刺して、はずせないようにします。(針を絵のほうにやつて) ごらんください、まっすぐ心臓に。

王 やめろ、神かけて言うが、おまえは驚きだ。おまえは誰なのだ。魔術を使って犯罪もやるのか。その絵に針を向けたら、この胸が刺されたかと思つたぞ。

エスター 陛下、妹はただの甘えん坊です。はずつばなまねをしているだけで、許されない魔術のことなど何も知りません。思いついたことをしただけなのです。

王 しかし向こう見ずにこんな戯れをしてよいわけがない。目が血走りそうになった。光が歪んでいるようだ。(ガルセランに) 彼女は美しくないか。

ガルセラン 美しゅうございます、国王陛下。

王 この、波うち、沸き起こり、燃えさかり、光り輝いているさまといつたら。

(ラーエル、その間に絵を取りはずし、巻き終えている)

王 その絵を断じて諦めないつもりか。

ラーエル (エスターに) 持つて帰るわよ。

王 ならば、神にお任せしよう。禍が襲つても、神がお守りくださるだろう。さあ急げ。ガルセラン、庭園の裏門に通じる道を行け。民が興奮しているからな。民というものの、弱虫だからもつと弱いものでおのれの弱さを測つてみたがるのだ。

ガルセラン (窓辺で) ですが、ごらんください、殿、宮廷のかたがたが、お妃さまを先頭にして近づいてまいります。

王 ここにか? いまいます。ほかに出口はないものか。彼らにあれこれ憶測をめぐらされるのは不愉快だ。

ガルセラン (脇扉を指さして) この部屋にお入りになつては?

王 何を考えているのだ。王たる者に自分の家臣から身を隠せというのか。だが妃の心痛も恐ろしい。妃も思うかもしれない——わたし自身がつ思っていることを。もつれた国王の威厳を救うとしよう。おまえはできる限り早く妃が出てゆくよう計らえ。(脇部屋に入る)

エスター あたしが言つたとおりだ。これは不幸の道だつて。

(王妃、マンリケと数人の者に伴われて入つて来る)

王妃 聞いたところでは、王がここにおいでだとか。

ガルセラン おいででしたが、立ち去られました。

王妃 ユダヤの娘がここに。

マンリケ 気違いが好き勝手に人形芝居の安物の盛装で着飾るとは。お

まえにふさわしくない王冠を取れ。冗談でもならん。マントも脱げ。(どちらもエスターがラーエルから取り去る)

手に持っているのは何だ。

ラーエル これはあたしのもんです。

マンリケ まずわれわれが確かめよう。

エスター あたしたちは他人の金品に手を出すほど貧しくありません。

マンリケ (脇扉に向かって行き) そちらの部屋も何かなくなつていないか、このこと同じく物欲しがり厚かましいことをしてないか調べよう。

ガルセラン (マンリケの行く手を遮つて) ここは、父上、お待ちくだ

さい。

マンリケ わしが誰か分からなくなつたか。

ガルセラン 自分同様によく分かつております。ですが、ご存じのとおり、父に対しても譲れない義務というものがありません。

マンリケ わしの目を見る。こいつ、耐えられないか。きょう一日でわしから息子がふたりも奪われてしまった¹⁷。(王妃に) おいでになりませんか。

王妃 そうしたいができない。いや違う、神かけて、できる。そうせざるをえないのだから。(ガルセランに) あなたの役目が騎士にふさわしくないとしても、忠実に果たしてくれたことには感謝しよう。死を見つたなら、伝えよ、わたくしはトレドへ戻つたと——ひとりで！

(王妃と従者、退場)

ガルセラン つまり不運な巡り合わせが、ほかならぬきょうという日に、おれを否応なしに軍隊から郷里に導くことになっていたわけだ。

ラーエル (彼女の身支度をしているエスターに) たとえ死ぬことになつたつて、あたし、引き下がつたりしなかつたわ。

エスター (ガルセランに) ですが、お願いです、どうかあたしたちを帰らせてください。

ガルセラン まず国王のお考えを尋ねる。(脇扉をノックして) 陛下！——おや、返事がない！——もしや事故でも？——お叱りを受けようとも開けるぞ。

(王、出て来て、舞台前方で立ち止まる。その間に、他の者たちは後方に退く)

王 つまり、この世の名誉も名声も、ただ歩いていくうちに方向が決ま

り、目標がその値打ちを決めてくれるような平坦な道ではないということだ。一歩でも足を踏みはずせば高所から墜落し、ほんの少し躓いただけで笑いものになるのは、曲芸師のぴんと張った綱の上だけのことだろうか。きのうはあらゆる規範の二本であったのに、きょうは召使いの目も憚らなくてはならないのか。されば恩寵を求める心など消えてしまえ。おのが道を決めるのはおのれ自身だ。

(振り向いて) 何、まだいたのか。

ガルセラン ご命令をお待ちしておりました。

王 遠い国境にいたなら、おまえはずっと命令を待ち続けていただろうな。ガルセラン、おまえの二本には感染しそうだ。

ガルセラン 公平な領主というものはいかなる過ちも罰します、自らの過ちをも。しかし、自らを罰しない場合には、領主の怒りのとぼつちりを身に覚えのない者が受けるのです。

王 ガルセラン、わたしはそのような領主ではない。安心せよ！ われわれは皆これまで同様、おまえを愛している。だがともかくこの者たちを連れて行け、それも永遠にだ。他の者には一時の気まぐれでしかないことも、領主にあつては罪となる。(ラーエルが近づいて来るので) 来るな！ だが、その絵をまずはずして、取つて来た元の場所に戻して来い。そうしろと言っているのだ。ぐずぐずするな。

ラーエル (エスターに) じゃあ一緒に来て。(ふたりに脇扉に近づいて行きながら) ふだんどおり首にあたしの絵、掛けてる？

エスター 何をしようというの？

ラーエル あたしがしたいこと。どんな目に遭おうとも。

(ふたり、脇扉の中に行く)

王 では国境に戻れ。わたしもすぐ後を追う。人の目に再び耐えられる

ように、ムーア人の血できよう分け合った恥辱を雪ごうではないか。

(女たち、戻ってくる)

ラーエル すませました。

王 ならば行け、別れはいらん。

エステル 殿さま、あたしたちの感謝の気持ちをとお受け取りください。

ラーエル あたしの方は、なしです。

王 よかろう、感謝はなしだ。

ラーエル あたしの感謝は取っておきます。

王 それはつまり、永遠になしということだ。

ラーエル あたしのほうがよく分かっています。(エステルに) 行こう。

(彼女ら、ガルセランに伴われて退場。その際、老人は「ここへ深くお辞儀をする」)

王 あの女が去って行ったのはぎりぎりの時だった。というのもまことに王宮が退屈なあまり、時にはどうしても気晴らしが欲しくなるものだから。だがあの娘、美しく魅力的だが、向こう見ずで激しやすい気性と見える。賢者がそういうことに用心するのは正当というものだ。

アロンソ！

(従者、来る)

従者 陛下！

王 馬を用意せよ。

従者 トレドに行かれますか。

王 アラルコスだ。国境に行く。戦だ。であるから必要最小限のもののみ用意いたせ。

トレドでは四つの目がわたしを脅かす。二つは冷ややかな水をたたえる目、二つは火と燃えさかる目だ。

あの女、わたしの絵から離れようとはしなかった。死神にすら抗う気配だった。だが、元の場所に戻させるには、わたしがきつく命じるだけで事足りた。演技でしかなかったわけか。だが本当に額にはめただろうか。これからしばらくここを離れるからには、何もかも元の位置に戻してこれまでどおりにし、この度の出来事のわずかな痕跡も残さないようにしよう。

(脇部屋に入る。間。その間に召使いがラーエルの脱ぎ捨てた衣装を椅子から取って腕にかけ、王冠を手に持つ)

(王、ラーエルの絵を持って戻ってくる)

王 わたしの肖像画は持つて行かれ、これがその場所に。あの女の絵だ。手が燃えそうだ。(絵を床に投げて) 消えうせろ！ 厚かましきもここまでやるか。こんなことがあつてはならない。あの女自身のことを思い起そうとすれば当然、不快感がどうしてもつきまとうが、女の絵を見るとわたしの胸はカツと燃えだす。しかも彼女の手にはわたし自身の絵が。あの民がああ文字でやる許されない魔術のことは聞いたことがあるが、魔法のようなものがわたしに襲いかかってくる。

(従者に) それを拾い、まっしぐらに馬を飛ばして追いつけ。

従者 誰にでございますか。

王 誰に？ ほかでもない、ガルセランとあのふたりだ。これをあの女に返し、取り戻せ――

従者 何をでございますか。

王 自分の恥を召使いに知られてよいものだろうか。必要とあらば、わたしが自ら交換を迫ろう。その絵を拾え。――わたしは自分ではそれに触れない。(従者が絵を拾い上げる) 何とぶざまな！ 懐に隠せ。

だが他人のぬくもりで絵が暖められるなど！ よこせ。自分で持つ

て行く。ついてまいれ。今からでも追いつくぞ。

よくよく考えてみれば、いったん疑念がよぎったからには、事故が、いや暴力があの子の身に降りかかるかもしれない、その点、一番よいのはわたし自身が護つてやることだ。さあ、わたしについて来い！

(絵を見つめ、懐にしまつてから) あのわき道に隠^レ棲^イ城があつたのではないか、祖父のドン・サンチョがムーアの女を囿つて世間から隠れていた――

従者 さようでございます、陛下。

王 わが王家は勇敢さにおいても有用性においても祖先の響に倣うが、弱さゆえの低劣な躰きを模倣しようとはしない。とりわけなすべきはおのれ自身を克服することであつて、そうしてこそ敵なる征服者に立ち向かえるのだ。

レテイロといったな、あの城は？――何をしようとしたのだろう。そうとも、ともかく進め！ 口外無用だぞ。しかもおまえは何も聞いていなかった。なおのことよい。行くぞ！ (従者とともに退場)

(幕が降りる)

第三幕

王の離宮の庭園。後方にタホ川。上手前方に広い四阿^{あずまや}。下手に一列になっている請願者たち、手に陳情書を持っている。イーザクが彼らのそばに立っている。

イーザク ここにたむろするなど、もう言つたぞ。ここを程なく娘が散策するのだ。娘とあのかたが。あのかたご自身が。「誰が」とは言っていないからな。恐れ戦いて、とつとどうせろ。陳情書はトレドにいる国王の顧問官のところを持って行け。(ひとりから陳情書を取り上げて) 見せろ。

――埒もないことを。行つちまいな。

請願者 1 逆さにお持ちです。

イーザク 請願の中身がすっかり逆さまだからな。あんたも逆さまだ。ここですぐずぐずしないで、行つちまえ。

請願者 2 イーザクどの、お耳を。トレドのあたしをご存じでしょう。

イーザク 知らん。このごろめつきり目が悪くなつてな。

請願者 2 それでもあたしはあなたを存じています。この、あなたが失くされた財布をお返しします。

イーザク わしが失くした？ おお、緑の絹の、思い出した。十ピアスター入っていたな。

請願者 2 二十です。

イーザク 二十？ おや、目が良くなつた。記憶だけが時々悪くなる。では手紙にはどこでどうやって見つけたか、出来事の一部始終が書いてあるのだな。お上に届けるのはもう無用だが、こつちによこしな。おまえが正直なことが評判になるよう、しかるべき筋に通達しよう。(請願者たちは陳

情書を差し出し、イーザクは両手でひとつずつ掴み取り、地面に投げ捨てる。中身はどうでもいい。これが返事だ。（請願者3に）手に指輪をしているな。いい石だ。見せる。（請願者、指輪を渡す）筋が入っていて、純粋な輝きを損なっている。返すよ。（指輪を自分の指にはめる）

請願者3 ご自分の指にはめていらっしやる。

イーザク わしの指にだど？ いや本当だ。返したと思ったのだが。きつくて、無理しても取れん。

請願者3 そのまま取っておいってください。ですが、この手紙もお受け取りください。

イーザク おまえの思い出に両方取っておくよ。（指輪をじつくり眺めて）

国王にこの指輪を、ああいや、この手紙を吟味していただく。陳情には筋が入っているが、ああ、石に筋がと言おうとしたのだ。もうみんな行け！

——杖はないか。キリスト教の賤民を追っばらってやる。

（ガルセラン、その間に入ってきている）

ガルセラン 気をつける。葦の茂みに座って、自分の笛を好き勝手に作っているな。調子が少しばかり高いようだが。

イーザク あたしはここが隠れ場所だということをよく存じております。王さまはここにおられません。お越しになるつもりもございません。王さま

にご迷惑なことは——ガルセランさまであろうと、あたしが立ち去るよう命じなくてはなりません。それに変わりはないのです。

ガルセラン ついさつき杖を探していたな。見つかったら、こっちによこせ。杖はどうやらおまえの手より背中の方に似つかわしいようだぞ。

イーザク また急にお怒りになる。キリスト教徒というのははえてしてこうしたもの。まあどんどんお怒りになればいい。ただ、賢さと注意深さと柔軟な待ちの姿勢が足りませんな。王さまはあたしとしゃべって楽しまれます

ぞ。

ガルセラン たまらなく退屈な生活も、退屈がしのぎを削り合っていると、退屈のぎになるのだな。

イーザク 王さまとは国家や貨幣価値について話しております。

ガルセラン つまり新しい秩序はおまえがやったことなのだ。おかげで三グ

ロツシエン硬貨が二グロツシエンの値打ちに下がってしまったな。

イーザク お若いから、金はすべての基本なのです。敵が襲ってくれば、皆さまがたは武器を買う。傭兵は給料をもらうために戦う。給料は金です。

あなたがたは金を食べたり飲んだりする。なぜなら、それを買うからで、

買った、そのうち、誰もが短期手形になる時が来ますよ。あたしは王さまの顧問です。ガルセランさまがイーザクと幸運を分かち合おうとお思いに——

ガルセラン おれがおまえと幸運を分かち合う？ 偶然と厭わしい見せかけのおかげで、愚かしい者たちの勝手気儘な所業に巻き込まれてしまった

とは、おれは呪われている。その所業のために、義務と誓いが厳しい試練にさらされるのだ。

イーザク あたしのラーエルヒェンは毎日、参内して寵愛を受けております。ガルセラン ああ、王が若い時を、がむしゃらに血気盛んな子供時代を、ほ

かの男たち同様に遊び呆けていらしたなら！ 子供の時にたったひとり、おとなの男たちばかりに囲まれ、育てられ、世話された。幼くして叡智の

果実で養われ、ご自分の結婚すら仕事としてこなされた。その王に初めて女がやってきた。女そのもの、女以外の何ものでもない女が来て、叡智の

愛弟子は愚かさの仕返しを受けている。高潔な女は半ば男、いや完全に男だ。欠点があつて初めて女になるのだ。いまや、錯覚することの多かったおかたが経験から授かる抵抗も敗れた。軽い気持ちで遊んでいるつもりが

抜き差しならない事態にはまってゆく。

だがこれもそう長くは続くまいと言っておこう。敵は国境付近に張りついているし、王はご自分の軍のものだから、おれがお連れする。そうすればおまえのべてんも一巻の終わりだ。

イーザク 成功するかやってみなされ。われわれと仲間でないなら、敵対関係ですな。幅広い深淵を飛び越えられるなら、首の骨を折られますぞ。

(笛の音が響く)

聞こえますか？ ユダヤの民を栄光と栄誉の高みに引きあげてくれたアハスヴェールスとその妻エスターのように楽の音とともにお出ましです。ガルセラン この王の放埒な振舞いにかつてのおれ自身の姿を見せられるのか。その姿を王の中にもおれの中にも見て恥入らされるのか。

(王がラーエルや従者とともに乗っている船が川に現れ、接岸する)

王 岸につける。ここがよい。四阿^{あずま}がある。

ラーエル 船が揺れる。止めて。落ちてしまうわ。

(王、岸に跳び移る)

ラーエル この板、ゆらゆらして弱そう。これで岸に行けと？

王 この手を取って。

ラーエル いやいや、目くらみがする。

ガルセラン (独り言で) 目がくらんでいるだと？ そうだとも。

王 (ラーエルを岸に導いてから) さあやっただ、大仕事だったな。

ラーエル いやいや、もうぜったい船に乗ったりなんかしないわ。(王の腕を掴んで) お許してください、王さま。あたし、こんなに弱くて。触ってみてください。熱があるみたいに心臓がどきどきしています。

王 怖がるのは女の特権だが、おまえは特権濫用だぞ。

ラーエル そうおっしゃって無慈悲にもあたしを支えてくださらなくなる

のですね。この庭の道も砂ではなくて、尖った石がばら撒かれていて、殿がたにはよくても女には歩きづらいわ。

王 絨緞を敷いてやれ。それでよい。

ラーエル あたしが殿のお荷物なのはよく分かっております。ねえさんがいてくれたら。だってあたし、病気で、死の床でぐったりしているのだから。

ここにはこんなクッションしかないの？(四阿のクッションを次々に投げつけて) いやいやいやいや！

王 (笑って) 有難いことにぐったりも少し収まったな。(ガルセランを認めて) ああ、ガルセラン、見てみる、子供だな。

ガルセラン すこぶる甘やかされた子供のようです。

王 子供は皆そうだ。彼女は上機嫌なのだよ。

ガルセラン 好き勝手のし放題ですから。

王 よいか、ガルセラン、わたしは自分が間違っていることを身にしみて感じている。だが、合図がひとつあれば、たったひとつとあれば、それでこの夢芝居¹⁸を御破算にして何もなかったことのできるのも分かっている。それゆえ目をつぶっている。混乱を招いたのが他ならぬこのわたしだから、きつかけが必要なのだ。軍隊はどうなっている？

ガルセラン とうにご存じのとおりです。敵が軍備を進めております。

王 わが軍もそうしよう。あと三日ほどだけ。それでこの恋愛遊戯を終わりにして、わが心の中から追い払おう、永久に。そうすれば好機も妙案もやってくるだろう。

ガルセラン 妙案はともかく、好機は逃げてゆきます。

王 行動を起こせばまだ取り返せる。

ラーエル こんなふうに話したりして、でもまあ、何の話かは分かっている。血、戦、異教徒との野蛮な戦闘。しかもあの人はあたしを敵視し、主君を

あたしから遠ざけ、軍隊に誘い込む。そうするとあたしは敵に難なく捕まえられるでしょう。

でもやつぱりガルセランさま、あたしはあなたが好きです。愛情深い女の扱い方を心得ていらつしやる。大胆に求愛なさることがうわさされています。ミンネの戦いの武勇伝も聞こえています。ご主君である王さまは愛の出会いの時も無骨で、優しい言葉もおつしやる先からすぐ後悔なさってしまうし、愛情の裏に憎しみが隠れていたりするけれど、それとは違ひますわね。こちらにいらして、あたしの横にお座りください。お話がしたい。

大勢の人がざわめいている中でひとりぼっちでいたくないのです。でも来てくだらないのですね。いいわ、あなたとは離れていきましょう。（泣きながら）あたしには喜びも慰めも与えられない。奴隷のように遠ざけられている。とうさんの家にいさえすれば、誰もがあたしの思いどおりになってくれるでしょうに、ここでは軽蔑されるのけ者なのです。

王 行ってやれ。

ガルセラン まいれと？

王 行けといったら行け。

ラーエル ここにお座りになって。近く、もつと近く、そう。もう一度、あたしはガルセランさまが好きです。ほんとうに生粋の騎士ですわ。尊大なカステイリーヤの鋼の騎士が敵たるムーア人から見よう見まねで習い覚えたような名ばかりの騎士とは違います。その違いとは、ムーア兵は生まれながらの心を表して繊細にして巧妙に行なうことを、カステイリーヤ兵は、借り物なので、粗野で雑に真似るところです。お手をください。どうでしょう、この柔らかさ。でもほかの武人と同様、剣を振るわれるのですね。それでいて、婦人の部屋にも出入りされて、朗らかにつきあうしきたりも弁えているのですわ。この指輪はドニャ・クララからのものですね。

あの人は、たえず恥ずかしい思いを繰り返しては赤くなり、お顔に足りない色を補わなければ、頬を染める恋をしているにしては青白すぎます。でもほかにも、いくつも指輪をしていらつしやるのですね。恋人が何人いるのですか。さあ、白状なさいませ。

ガルセラン こちらから同じことを尋ねたら、いかがでしょう？

ラーエル あたしは恋をしたことはありません。でも恋ができるようになるかもしれません。もし誰かの胸の内にある狂気に触れて、それにあたしが満たされたら、あたしの心は震えるでしょう。それまでは、関係ないよその神殿にでもひざまずくように、恋の偶像崇拜のしきたりに従います。

王 （この科白の間、前後に行き来していたが、いま、下手前方で従者のひとりに向かって、小声で）わたしの武器を一式、わきの圍亭に持って行き、わたしが来るのを待て。わたしを必要としている軍の野営地に行く。（従者、退場）

ラーエル あなたの王さまをごらんになって。王さまは愛しているつもりでいらつしやる。でもあたしがあなたに話しかけてお手を握っても、あのかたには気にならないのです。よき家長のように忙しく騒がしい一日を全うし、夜になると帳簿を閉じて満足してしまします。もう結構です。あなたも王さまやほかの人たちと変わりません。ねえさんがいてくれたらなあ。考えが深くて、あたしより断然賢い。それでいて意志と決断の火花が胸に落ちてきたら、一気に炎と燃え上がる。男だったら英雄になっているわ。あなたがた皆、ねえさんの眼差しと勇氣には負けてしまうでしょう。あたしはねえさんが来るまで眠ろう。あたし自身はどのみち一夜の夢でしかないのだから。（腕をクッションに置き、その腕に頭を乗せる）

ガルセラン （立ち止まって、眠っている女を見つめている王に歩み寄って）
陛下！

王 (なおも見つめながら) 何だ？

ガルセラン お許しくださいるなら野営地に、軍に戻ります。

王 (同様に) 軍が野営地を去ったと？ なぜだ。

ガルセラン わたしの申すことをお聞きください。わたしが野営地に行くところにいるのです。

王 そこで話し、意見を言い、しゃべるのだな。

ガルセラン 何をでございますか。

王 わたしのことだ。ここで見聞きしたことだ。

ガルセラン そのためには何よりもきちんと理解することが必要なのです。

王 そうとも！——おまえは奇跡を信じるか？

ガルセラン 殆ど信じています、近ごろは。

王 なぜ近ごろは、なのだ。

ガルセラン 普通は、高く見あげる人のみを愛するものですが、さげすみな

がら愛することが——

王 さげすむという言葉は厳しすぎるな。見さげると言ってみれば——、し

かしそれでもやはり驚くべきことだ。

ガルセラン 奇跡は無論やや古く、神が女を男のあばら骨から創り出したという楽園のあの日に発しております。

王 だが事を終えたあと神はまた胸を閉じて、その入口を意志に見張らせた。

軍に行け、だがひとりではなく、わたしと一緒にだ。

ラーエル (すつと立ち上がって) お日さまがあたしの隠れ場所に忍び込んでくる。誰かあつちのほうの覆いを支えてくれないかしら。(上手の袖を見て) あつちに男がふたり、重い武器をかついでいく。槍がその役に立つわ。(袖に向かって呼びかける) こつちよ、こつちに来て！ 聞こえない

の？ 速く。

(使いにやられていた従者ともうひとり、登場。前者は王の兜と槍を、後者は楯と甲冑をかついでいる)

さあ、その槍をちょうだい。こつち側で屋根を支えられるように、穂先をこの地面に突き刺して。そうすれば、あつち側で屋根を支えられてできる影が広がるから。——さあやってちょうだい。——そういいわ。

——そつちの人は蝸牛みたいに自分のおうちをかついでるのね。——うかほかの誰かのおうちでなければだけ。——その楯を見せて。——まあ、鏡になるわ。ここにあるものはどれも荒削りだけど、急場しのぎには足りるわ。(楯が彼女の前に差し出される) 髪を整えよう。能天気ピンととび出ているのを後ろへやったら、神が人間をこんなに見事に造られたことが嬉しくなってしまう。ただここが反っているから顔が歪んでしまう。天よ、お助けを！ ほつぺたがはれぼつたいじゃない。だめ、あなた、あたしたち、自分が太つてることに満足してるのよ。——それから次は兜ね。戦の目的には反してる。だって、勝利に一番貢献する目を隠すんだもの。でも、恋の駆け引きには何てお誂え向きなかしら。あたしに兜をかぶせて。——ああ、痛いじゃないの。——愛する人は怒るけど、得意になるわ。目隠しを下ろそう！(目隠しを下ろす) あの人を闇の中だ。でも、もしかしてあたしたちから逃れよう、あたしたちを置き去りにしようと思つて、兵隊の道具を取りにやつたんだわ。目隠しを上げよう。(目隠しを上げる) 光あれ！ お日さまの勝ちだ。霧をみんな蹴散らして。

王 (ラーエルのほうに歩いて) ばかな遊びをして。愚賢い子だ。

ラーエル さがつて！——楯をちょうだい。槍をちょうだい。力づくであったしに近よる人がいる。自分の身は自分で護るわ。

王 武器をよこさない。おまえに近づくのは悪人ではない。(ラーエルの

両手を掴む)

(エステル、下手後方から登場)

ラーエル ああ、ねえさんなのね。よく来てくれたわ。仮装大会はおしまよ。さあ早く早く！ あたしの頭をもぎ取る気？ うまくやって。

(エステルのほうに急いで) 改めて、ようこそ、ねえさん。ねえさんがそばにいてくれたらってどんなに切に願ってたかしら。それと、トレドで買ってきてって、あたしが頼んでた腕輪と留め金と軟膏と香料、持ってきてくれた？

エステル 持ってきたわ。ついでにもっと重いものも。悪趣味な飾りみたいな悪い知らせよ。

国王陛下さま、お妃さまはトレドの町を離れ、あたしたちが不幸にも陛下に初めてお会いしたあの離宮に向かわれました。(ガルセランに) お妃さまにガルセランさまのお父上、マンリケ・ララさまもご同伴され、また、あちこちに書状を送られて、ご政道の協議をしようと国中のご家臣のかたがたを召集しておられます。それはまるでこの王国に主人がいないかのよう、主人であり国王である陛下がお亡くなりになったかのようにございます。

王 おまえは夢でも見ているのだろう。

エステル 目をあけて見張っております。とりわけ妹の命を。妹はおびやかされ、ついには生贄にされてしまいます。

ラーエル ああ、何てこと！ ですからとうにお願いしていたではありませんせんか、殿さま、お別れして、宮廷にお戻りになり、あたしの敵の策略を阻止してくださいと。なのにお留まりになった。ごらんください、ここに殿の武器がございます。兜、楯、そちらに長槍。揃えておきたいもの。——けれどあたしにはできません。

王 (エステルに) 呼吸する度に十回矛盾することを言う、このおばかさんの面倒をみてやってくれ。わたしは宮廷に行く。だが武器は要らない。胸襟を開き、武器を手にはせず家臣の輪の中に入って行き、反逆を企てるのは誰かと問おう。彼らに知らしめるぞ、主君はまだ生きていること、太陽は夜になつても死なず、朝になれば新たに昇つて輝くのだと。ガルセラン、ついてこい。

ガルセラン 用意はできております。

エステル ですが国王さま、あたしたちはどうなるのでしょうか。

ラーエル ああ、どうか行かないください。

王 この城は堅固で、城代は信頼できる男だ。身を挺してでもおまえたちを護つてくれるだろう。わたしは不在にしていたことを、しかもどれほど不在にしていたかを感じているが、わたしの庇護を信頼し、罪も過ちも分かち合っている者が、わたしの不在をかこつことがないようにしたいのだ。来い、ガルセラン。いやむしろ、おまえが先に行け。というのも、わたしが召集したのでもなく、権限もなしに開かれた家臣の集会を見たら、罰しなくてはならないが、それは望まないからだ。であるから皆に早々に解散するよう命じよ。そしておまえの父ぎみにはこう言え。そなたは王が子供だった時は王の保護者であり代理人だったが、いま、王自身が権利を守るすべを心得ており、それはそなたに対しても誰に対してもであると。さあ行こう。おまえたち、さらばだ。

ラーエル (王に近づいて) 陛下！

王 今はよせ。わたしには力ときっぱりした意志が必要だから、別れるこの時に心を弱くしたくないのだ。わたしが役目を果たす時、おまえたちの耳にわたしのうわさが聞こえるだろう。未来が何をどのようにしてもたらすかはまだ暗い闇に覆われている。いずれにせよ、おまえたちの庇護は約束

する。さあ、ガルセラシ、神とともに行こう。神がおまえたちとともにおわすよう祈る。

(王とガルセラシ、下手に退場)

ラーエル あたしを愛してはいらっしゃらないのかわ。とつくに分かった。エスター まあ、ラーエル、あとから分かつてても役に立たないわ。痛い思いをしてやつと分かるものよ。あたしは注意したのに、ラーエルは聞いてやいなかったわね。

ラーエル あのかたは初めは火のように熱かったわ。

エスター いま、慌てすぎていたのを冷まして帳尻を合わせているのね。

ラーエル でも信頼していたあたしはどうなるの。逃げよう。

エスター 街は人で一杯よ。国中でユダヤ人を迫害する暴動が起きているのだから¹⁹。

ラーエル ならばあたし、死ぬのね。まだ若いのに。まだ生きていたい。生きるのとは違って、そう、死ぬのって、警告もされないし思いがけないことなんだわ。ともかく死ぬ瞬間が恐ろしいのよ。(エスターの首にしがみついて) 不幸だわ、あたし、ねえさん、救われないわ。(しばらくしてから、嗚咽で途切れる声で) 持ってきてくれた首飾りには紫水晶^{アメジスト}もついている？

エスター うん。それに真珠も。ラーエルの涙のように明るくて豊かなものよ。

ラーエル ぜんぜん見る気がしない。あとになって、あたしたちの拘留が長くなったら、永遠に単調な毎日で気晴らしが必要になったら、つけてみて、死ぬために着飾るわ。おやまあ、誰がやってくるのかしら。——はははは、何てこと、とうさんじゃないかしら。鎧なんかつけて。

(イーザク、頭に鉄兜、長い上着の下に胴鎧をつけて下手より登場)

イーザク わしだよ、わしの寿命を短くしてくれるだけの悪い子たちの父親だ。そうだ、鎧をつけてる。人殺しがおびやかしくないか。このからだがりひとり身を護れるものか。不意の一撃で頭は粉々になる。鎧は手形も隠しておけるし、隠しに蓄えの金貨も入れられる。それをどこかに埋めて、貧乏や死から身も心も護るのだ。おまえたちがわしのことを笑ったら、わしと同じイサクという名だったユダヤの太祖の呪いをかけてやる。おまえたち、敬虔なヤコブの声を使ったり、エサウの手だと偽ったりして長子相続権を不正に使っておって。わしは自分の面倒はみる。おまえたちのことはもう知らん。聞け!

ラーエル 何の音？

エスター 橋を引き揚げているのよ。

ラーエル 王さまが門を出て行ったってことね。急いでいらっしゃる。またお戻りになるかしら。そうならないと思ってしまう。最悪のことを思ってしまう。

(エスターの胸に沈み込んで) でもね、ねえさん、あたしそれでも本当に愛していたのよ。

(幕が降りる)

第四幕

上手前方に玉座のある広間。その左側に数脚の椅子が一行に並べてあり、カステイリーヤの重臣が八人ないし十人ほど座っている。玉座の一番近くにマンリケ・デ・ララ。立ち上がる。

マンリケ さて、わたくしたちは喪服に身を包んでここに参集しております。お屋敷がこの近辺であつて、時を移さずご参集していただるべく、ごくわずかなかたのみです。しばらく後にもう幾人かおいでになりませぬ。しかしいまはもはや一刻の猶予もならない、国全体にかかわる緊急の難題がわれわれにしっかりと判断せよと命じております。わけてもこの重大な集まりに不在でおられるのが、議長となる権利ばかりでなく、このような会議を招集することからしてその権限をお持ちのかたなので、われわれには初めから半ば会議する権利がないのです。皆さま、ですからわたくしは王妃陛下をお招きしようと考えました。奥方さまには協議する内容が重くはありますが、われわれの会議にご臨席いただく。さすれば、われわれが主君不在のまま、そして身勝手に会議を開いたことにはならないからです。

さて本日の会議の議題は、すでに皆さまがたにはご周知のことと存じますが、ご周知でなければよろしいのにも思つてしまいます。わが主君である王は地位、身分、品格が高いばかりではございません。ええ、天から賦与された才覚も高いおかたゆえ、書物を紐解いてわが国の来し方を眺むれば、あのおかたほどの人物を殆どひとりとして見出せないであります。ただし、あらゆる善なるものを動かす梃子の役割をする力はいったん道から外れて迷い始めると、過ちも同じ強さ

で犯してしまうもの——王もひとりの挑発的な女にそのかされて、宮廷から遠ざかってしまわれた。このような案件を裁くのは、われわれにはまったく相応しくないので。——王妃陛下！

王妃、幾人かの女官につき従われて、上手より登場。立ち上がった家臣たちに、ふたたび着席するよう手で合図してから、玉座に座る。

マンリケ 奥方さま、よろしゅうございますか。

王妃 (小声で) 続けなさい。

マンリケ ただいまの言葉を繰り返しましょう。「このような案件を裁くのは、われわれにはまったく相応しくないので。」しかし、ムーア人は国境で軍備を進め、わが国をぐいぐい圧迫し戦を始めようとしております。このような時に、王が自ら召集し、また徴兵した軍隊をもつて危機を阻止するのが王の権利であり義務でもあるのですが、いかにせん、その王がご不在なのです。むろん、お戻りになるでしょう。分かつております。よしんばそれが単に、われわれが会議を開いた傲慢さをお怒りになられてのことであろうと。しかし王をわれわれから遠ざけた理由がなくならないならば、王に元の鞆に戻られてしまえば、われわれは相も変わらなすてなし子のままなのです。よろしゅうございますか。(王妃、続けるよう合図する) そこで何よりもあの毒おんなを追ひ払わねばなりません。そこでいくつかの提案がなされております。ある者は金貨で買収しようと言ひ、またある者は捕らえて国外に追放し、遠く離れたところで監禁しようと言ひます。しかし王も金は持つておりますし、いかに遠く追ひやろうと、権力者は見つけ出してしまふものなのです。第三の提案は——(王妃が立ち上がっているの

で)奥方さまは、畏れながらわれわれの冷酷な職務にはお優しすぎます。堅固なご意志によって微動だにしない奥方さまのお優しさ、おもにそれゆえにわが殿が離れて行ってしまわれたのかとも思われます。非難しているのでございませぬ。事実のみ申し上げております。それゆえご自身のお考えは諦めてください。ただ、お話しになるおつもりがございませば、どうぞ、仰せください。いかなる花のさだめが、いかなる追従罰が愛人の過ちに相応しいとお思いでしうか。

王妃 (小声で) 死罪です。

マンリケ まことに？

王妃 (よりきつぱりと) 死罪です。

マンリケ 皆さま、お聞きになられたか。これが、わたくしにはこれまで、男でありながら口にするのが憚られた第三の提案だったのです。

王妃 殿がたの前で口をきくことを恥じます。礼儀にかなっていないとも言えませんが、必要に迫られてのことです。結婚とはもつとも神聖なものではないでしょうか。というのも、結婚は、これを経なければ禁じられていることを正当と認めるものであり、素性のよい者には誰にとつてもおぞましいことを、神の御心にかなう義務の領域に迎え入れるものだからです。いと高き神のそのほかの規律も、善の衝動を強めるものばかりです。けれども、罪をも貴いものにしてしまうほど強いものはいかなる戒律より強力なはず。あの女はこれを冒瀆したのです。しかしわが夫の過ちがなお続くなら、わたくし自身がとうの昔から罪びとに過ぎず、あのかたの妻ではなかったことになりす。そしてわたくしたちの息子は生まれ損ないの余計者であり、子供自身にとつて恥辱、両親には不名誉ということになるのです。皆さまが、わたくし自身に罪があるとお思いなら、わたくしを殺してください。罪にけが

されているなら生きていたいと思いません。その時には、あのかたは周りを取り巻く王女の中から妃を選ばよいのです。許されたことではなく、気儘な振舞いばかりがあのかたのお心になつていらつしやるのですから。ですがあの女はこの世の汚点です。ですから、皆さまの王とその国を清めてください。

マンリケ しかし国王は忍耐されませぬか。

王妃 されませぬ。忍耐すべきであり、したがって忍耐しなければならぬのですから。殺人者への復讐の念が残ろうとも。誰よりもわたくしに、この胸にお怒りをぶつけてくださればよいのです。(座る)

マンリケ ほかの逃げ道はないと言わざるをえませぬ。戦闘では高位のかたがたが渴きにやつれ、馬の蹄に踏みつぶされ、これまで絞首台に送られた罪びとより、あらゆる苦しみがなお強烈に倍加されて、苦しく酷い死にかたをしている。病氣も日々、最良の勇士をこの世から連れ去っている。神の御言葉、神自らが築かれた聖なる秩序が、冒瀆を働いた者の死を要求する時に、人が恐れ戦こうとも、神は自らが創つた人間の命を惜しまないものだ。われわれ揃つて王に要求しよう。王をわれわれから、われわれを王から遠ざけたあの障害を取り除いてくださるよう頼むとしよう。王が拒まれたなら、血の正義が支配するのだ。領主と正義がふたたび一体となり、一体となった両者にわれわれがお仕えできるようになるまで²⁰。

(ひとりの従者、来る)

従者 ドン・ガルセランです。

マンリケ よくも裏切り者めが。やつに――

従者 国王陛下のご委託を受けておられます。

マンリケ ならば話は別だ。仇敵であろうと、王の言葉を語るなら聞く

耳はある。

(ガルセラン、入って来る)

マンリケ 委託の向きを申せ。それが済んだら、さらばだ。

ガルセラン 王妃陛下、父上、そして皆さま、わが国の最上のかたがた。

わたしはきょう、これまでにかつてなかったほど痛感していることがございます。信頼が財産の中でもっとも貴重なものであること、そして軽率さとは、罪の意識がなくても、罪より破滅的で心を萎えさせるものだという事です。と申しますのは、過ちもひとつだけなら許してもらえますが、軽率はあるとあらゆる過ちを引き寄せてしまうからです。でありますからきょうは、けがれていないと感じておりますが、名譽をけがした若気の至りを贖おうと、皆さまがたの前に参上いたしました。

マンリケ それはまたいずれのことだ。いまは委託の向きを申せ。

ガルセラン 国王はわたしを通じてこの会議を解散させます。

マンリケ そして国王は軽率を使い遣ったから、その者に旅の保証のほか何も確かなものを与えなかったのだらうな。通常ならば王直筆の書付けがあるのだが。

ガルセラン 王はわたしのあとを追ってすぐお越しになります。

マンリケ それで十分だ。ならば国王の名において最高会議を解散するかたがた、お役目大儀でございました。しかしなお、ぜひにもお頼みしたいがございます。ドン・アルフォンソがわれわれの職務を代わってくださいるのか、われわれに彼の職務を行なう責任があるのか、明瞭になるまで今しばらくご帰館にならず、分散してこの近辺にてお待ちいただきたいのです。(ガルセランに) しておまえは、かくも領主の使いを巧みにこなすからには、偵察に適しているやも知れん。わし

が勧告したこと、すなわち最高議会が解散したのは事実だが、議員が実際に一致団結して行動を起こす用意のあることを王に伝えよ。

ガルセラン いま一度、皆さまの前でわたしは、このもつれた事件の罪を負うことを拒否いたします。単なる偶然がわたしを軍の野営地から連れ出したように、あの女を民衆の怒りから護るよう、王がわたしを選んだのも偶然だったのです。正義に悖ることを避けようとして、できる限り警告し反論し釈明しましたが、やはり無駄でした。わたしの言うことが違っているなら、軽蔑してください。ドニャ・クララ、あなたは両家の父、そしてわたしの望みによってわたしのものと定められているが、あなたの高潔なかんばせを隠さなくてよいのだ。確かにあなたに相応しくない——これまでも相応しくなかったでしょうが——、せめて以前ほどには相応しいわたしがいまあなたの前に立っており、誓おう、見てのとおりだと。

マンリケ そうであり、おまえがまだ男であるなら、カステイリヤ男子となつて、われわれに与し、ともに祖国の大事を導くのだ。おまえの顔はレティーロ城で知られているから、おまえが要求すれば隊長は門を開けてくれる。われらが主君たる王が聞く耳を持たなければ、そうやって入る必要もあらう。

ガルセラン わが主君たる王の意に反することには与しません。

マンリケ 選択権はおまえにある。いまはこのかたがたについて行け。思っているよりすべてうまく行くかもしれない。

(召使いたち、下手より入ってきて)

召使い 国王陛下です。

マンリケ (重臣たちに中央扉を指し示して) さあここから外へ。

(召使いたちに) おまえたちは椅子を壁ぎわに並べろ。ここで会議が

あつたことを王に気取られないようにするのだ。

王妃 (玉座から降りてきて) 膝ががくがくする。誰もわたくしを助けてくれないのですか。

マンリケ 力と礼は、かつて友、

いまや敵となりはてぬ。

力はいまも若者に、

礼は逃がれる年寄りへ。

よろけはすれど、さあお手を、

力うせるも、礼死せず。

(マンリケ、王妃を上手に連れて退場。重臣たちとガルセランは中央

扉から立ち去る)

(王、下手より登場。後ろから小姓)

王 栗毛が足を引きずっているというのか？ 乱暴な走り方をしたからな。だがもうあの馬は要らない。手綱を引いてトレドに連れて行かせ、ゆっくり治してやるのが一番の治療だ。わたしのほうは妃の馬車に乗り、妃と並んで民の前に現れてやる。そうすれば民は自らの目で見ていることを信じ、諍いも軋轢も片づいたと思うだろう。

(小姓、退場)

王 わたしひとりだ。誰も迎えに来ないのか？ 何も掛かっていない壁に、物言わぬ椅子。ついでしたがた会議があつたようだな。おお、この空の椅子は、そこに座って話していた者たちより雄弁に語る。しかし詮索したり眺めたりすることが何だというのだ。取り戻すことだ。そこから始めよう。この中に入れば女官の部屋に行ける。招かれざる道を行ってみるか。(上手の脇扉に近づく) しかし扉に鍵が掛かっているのか？——おい、中の者、王だ、この館の主人だ。わたしには鍵も

扉もないのだぞ。

(ひとりの侍女、扉から出てくる)

王 おまえたち、鍵をかけるのか。

侍女 お妃さまです、陛下——

(王が強い足取りで入って行こうとするので)

中の扉もお妃さまご自身で鍵をかけておいでにございます。

王 押し入ろうとは思わん。伝えよ、わたしは戻ってきた、そなたがこちらに來い——いやそれより、来てくれと言っていると。

(侍女、退場)

王 (玉座に向かつて立ち) 他の椅子を見下ろす高き玉座よ、われわれ

夫妻がおまえより低い者にならないように、そしてまた、おまえの階段を登らずとも、偉大で善なるものからはずれないようにさせてくれ。

(王妃、登場)

王 (手を差し出して彼女に歩み寄り) エレオノーレ、しばらくだな。

王妃 ようこそお越しを。

王 手は出してくれないのか。

王妃 お目にかかれて嬉しゅうございます。

王 手は出してくれないのか？

王妃 (わっと泣き出し) おお、父なる神よ。

王 エレオノーレ、この手はベストにかかつてはいない。わたしは戦に行く。行く使命と義務があるからだ、そうすればこの手は敵の血にすっかり覆われる。だが穢れを消し去ってくれるのは澄んだ水だから、わたしは手を歓迎してもらえように清めよう。からだを清める水は心の精神的な清めにもなるものだ。そなたは、後悔することにそうした力があると信じられるほどにも信仰篤いキリスト教徒だ。そうでな

いわたしのように、行為を判断基準にしている者はそのような控えめな手段には向かわない。というのも、後悔という手段は罪を取り除きはしても、損害は取り除いてくれないからだ。いや、それは半ば、新たな過ちを恐れる心でしかないからだ。しかしより良き意志を持ち、喜ばしい決心をすることが現在と未来を保証するならば、わたしが差し出しているものを悟り、すつかり受けとめてくれ。

王妃 （両手を差し出して） おお、喜んで。

王 両手はいけない。心臓から遠いほうだが、同盟や契約の証しに差し出すのは右手のみだ。それはもしかすると、心の中に根を張っている感情ばかりでなく、人間の意志のすべてである判断力²¹も、約束したことを持続させなければならぬと暗示するためなのかもしれない。感情は時のように移ろいやすいが、斟酌考量したものは効力を持ち続けるからな。

王妃 （右手を差し出して） それでも構いません。わたくしのすべてを。

王 手が震えている。（手を離して） 善良なそなたにつれなくするつもりはない。だがつれなくなつたのが、わたしの物腰が以前よりきつくなつたからだとか、過ちがいかに大きいかわたしが分からなくなつたからだとか、そなたの善意を敬わなくなつたからだなどは思わないでくれ。

王妃 赦すのは簡単なこと。理解するほうがはるかに難しい。どうすれば理解できたのでしょうか。分かりません。

王 わたしたちはついこの間まで子供だった。子供だったわたしたちはかつて結婚させられたが、そのあとも敬虔な子供のまま生きて来た。しかし子供は育ち、年を重ねるもの。成長の節目の年が来たことは、不快感が生じて分かる。それは病気のことがよくあるが、病気はわた

したちに、自分がこれまでと同じものであり、同時に違うものになっているから、元のものの中で違うものが根を張り出していると警告してくれる。わたしたちの心はそのようにできており、拡大して、元の中心の周りに新たな広がりを描いてゆく。そういう病気をわたしたちは克服したのだ。わたしたちと言った。つまり、そなた自身も心の成長を受け入れられると思うからだ。無関心でいたために警告を聞き逃したということのないようにしようではないか。今後は国王と王妃に相応しく生きてゆこう。事実、そうなのだから。世の中にも、その偉大で善なるすべてのものにも心を閉ざすまい。蜜蜂が昼間たつぷり取って蓄えた収穫物を携えて夕方、巣に戻るように、わたしたちも家族の中に戻って、自らがしばしの不在を通じて倍も甘くなっていることを知ることにはしようではないか。

王妃 あなたがそうお望みだとしても、わたくしにはなくても構いません。

王 そなたも、価値を計る基準となるものを持ち合わせれば、これまでそうしたことがなかったのを残念に思うだろう。だがもう過ぎたことは忘れよう。新たに開拓している時にあれこれと、昔のがらくたを掘り出して道を塞いでしまうのは好きではない。わたしはおのが罪を免除する。清いそなたにはその必要はない。

王妃 違います、違います。おお、何と黒く禍に満ちた考えがわたくしの臆病な心に入り込んで行ったかを、ご存じでしたら。

王 復讐欲のようなものか？ それならなおのことよい。ならばそなたは、赦すのは人間の義務であり、誰しも、最善の者でさえ確信など持っていないと感じているだろう。誰かに復讐したり、罰したりするまい。というのも、信じてくれ、あの女は無実だから。平凡が無実であ

ると同様の、抵抗などせず身を委ねてしまう空しい弱さなのだ。わたしが、わたし自身がすべての責めを負う。

王妃 ああ、わたくしを支え慰めてくれるものを信じさせてください。ムーアの民とそれに類した者たちはいかがわしい秘術を使います。絵や手振りやまじない、人の胸に入ると心をひっくり返してその人を言いなりにしてしまう邪悪な飲み物を使って。

王 わたしたちはさまざまな魔法に取り囲まれているのだが、わたしたち自らが魔法使いなのだ。遠く離れているものが考えひとつで近づいたり、蔑んでいるものが、時がたつと魅力的に思われたりする。歴然たる奇跡に満ちた世界で、わたしたち自身があらゆる奇跡のうちの最大の奇跡なのだ。

王妃 あの女はあなたの絵姿を持っておりませぬ。

王 そのうち返させ、はっきり見えるように壁に貼り、後世の子孫のためにその下にこう書こう、「無能ではなかったが、職務と義務を忘れた王。彼が自分を取り戻せたことを神に感謝しよう」と。

王妃 けれどご自分の首には――

王 ああそうだ。あの女の肖像だな？ そなたにも知られていたか。(鎖のついた肖像を首からはずし、上手前方の机の上に置く) ならばここに置こう。置いておけばよい。雷が鳴ったあとの稲光はもはや危なくないからな。

しかしあの娘自身はどこかにやっけてしまおう。それから、同じユダヤ人の男と――(舞台を前後に行きつ戻りつ、時おり立ち止まりながら) それはないが。――あの種族の女は我慢できる、よいとも言える。

――しかし男ときたら手は汚れているし、欲得ずくだ。そんな輩があるの女に触れるなど、させてなるものか。つまりは彼女はもつとよい人

種だったのだ――しかしわたしたちに何の関係がある？――どうなるうと。近かるうが遠かるうが！――連中が勝手に心配しているがよい。

王妃 ですが、ドン・アルフォンソは実際、心を強く持っていてくださるでしょうか。

王 (立ち止まって) よいか、そなたはあの女を知らんのだ。この広い世界の欠点すべてを、愚かさも自惚れや弱さも悪たくみや反抗や媚も、そうそれに所有欲もすべてひとつにしてみる。そうすればあの女が出来る上がる。かつてあの女が好きになってしまったのを、魔法と言わず謎だと言うなら同意しよう。だがそれがまた自然でないとしたら、恥じるべきだろうな。(行ったり来たりする)

王妃 おお、自然ではありません。ありませんとも。

王 (立ち止まって) やはり魔法なのだ。その名を慣れという。それは最初ははっきりしないがあとになるとしつかり固まるもの、初めのうちには邪魔で不快だが、そこから有難くない印象が消え去る。その繰り返しによって、なくてはならないものになってしまう。からだの場合も事情は変わらない。わたしが掛けていた鎖――いまは置いてある、永遠に片づけた――首も胸もその感触に慣れていた。(身震いして) ぼつかり空いた隙間に寒気を感じる。ほかの鎖を探そう。からだは、気をつけろと警告する時、冗談を言わない。それはもうよしだとしよう！だがそなたたちが、あの哀れな愚か者に血の仕返しをしようとしたのは良くなかったぞ。(机に歩み寄り) というのもこの目を見てみよう――そうとも、この目だ！――からだ、首、この姿かたち、神がまさに名人芸で組み合わせたものだ。それを自分であとから歪めてしまつたが、このからだの中にある神の御業を尊敬しよう。神が畏くも創造されたものを壊さないでおこう。

王妃 触つてはなりません。

王 またそのようなばかげたことを！　そして実際に手に取ったからといって（肖像を手の上に置いて）わたしは別人になったのだろうか。冗談にそなたをからかつて、鎖を首に掛けてみるか。（掛ける）そなたをぞつとさせるこの絵を懐にしまったら、その分、わたしは、自分が過ちを犯したことを悟り、過ちを非難しているアルフォンソでなくなつたのだろうか。だからいよいよばかげたことはよしにしてくれ。（机から離れる）

王妃 ですが――

王 （王妃をキツと睨みつけて）何だ？

王妃 おお、神よ。

王 驚くな。だが、道理を弁えて、いつまでも同じことを繰り返さないでくれ。つまるところ、わたしは違いを思い出す。（机を、それから自分の胸を指さして）あそこにあの娘――いまはここにいるが――愚かだったし、愚かな振舞いもした。賢くなるうとしなかつたし、敬虔にも淑やかにもしようとしなかつた。徳高い女のやり方というのは、どこまでも自分の美徳でものごとを清算する。そなたが憂鬱な時には、皆が美徳で慰めてくれる。だが愉快なときに、陽気な気分を結局奪つてしまうのもまた美徳で、もしかすると美徳には罪が唯一の救いになると言つてもいいくらいだ。一口に美徳と呼ばれるものは時と場合によつて様々であり、虚ろなイメージではないが、そのイメージたるや、欠点がないにしてもまさにそれゆえ取柄もまたない。ともかく鎖を首からはずしてしまおう。というのも鎖をつけていると思ひ出してしまふ――

それにしても、エレオノーレ、家臣らと共謀したのは良くない、賢

くない、不愉快だ。わたしに腹を立てたのなら、それはそなたに理がある。だがあの男たちはわたしの家臣だ。あの者たちが何を望むのだ。わたしは子供か、自分がどういう境遇でどういう地位の者かまだ分からない男の子か。国政を彼らはわたしと共有しており、国政を担うのがわたしの義務だということはお分かつている。しかしわたしが、アルフォンソが、わたしの館で自分なりの生き方をしている人間が、男が、国事に携わっている男たちに釈明しなければならぬのか？　そんなはずはない。わたしが自分の怒りにしか聞く耳を持っていないなら、彼らの判断にも承認にもわたしが従わないところを見せるためにも、もと来たところにそそくさと引き返すところだ。

（舞台前方に向かって歩き、足で床をどしんと踏む）

そして最後はあの老体、ドン・マンリケだ。わたしの後見だったが、いまなおそうなのか？　（ドン・マンリケ、中央扉に現れる。王妃、両手を揉んで困惑しながら夫のほうを指さす。マンリケ、両手で安心させる仕草をして引き下がる）あいつめ、厚かましくも自前の知恵からこねくりだした教説で王に指図しようというのか。そうしておいて、ひそかに向こう見ずな行動に出るか――？　（舞台を斜めに行つたり来たりする）わたしが調べて裁いてやる。それでわざわざ犯罪のにおいがしたり、邪悪な計画や行動があったと分かつたら、その犯人がわたしに近い者であればあるほど、そう側近の場合も、ともかくそれだけ厳しくその向こう見ずな行いを償わせるぞ。

エレオノーレのことではない。そう、そなたは赦す。（王妃、この科白の間にそつと上手脇扉から立ち去っている）どこに行つた？　わたしをひとりにしてしまふのか？　自分の館でわたしは愚か者扱いか？　（上手脇扉に近づく）妃の許に行くぞ。――鍵が掛かっているか。（扉

を蹴破つて) さあ! 突撃して家庭の幸福をもぎ取るぞ。(入って行く)
 (ドン・マンリケとガルセラン、中央扉に現れる。ガルセランは一步、
 敷居を越えて踏み出す)

マンリケ わしたちと行動をともにするか?

ガルセラン 父上!

マンリケ しないか? ほかの者たちは先に行った。あとを追うか?

ガルセラン 追います。

(ふたり、退く。扉が閉まる)

(間。王が戻ってくる。聞き耳をたてる格好をする)

王 聞け、もう一度。——何も聞こえない。何もかも沈黙だ。——妃の

部屋は空で、いなくなっていた。しかし戻ろうとして張り出し部屋を
 通った時、馬車や馬の物音を聞いた、急激なギャロップで逃げてゆく
 ような。わたしはひとりきりか?——おい、ガルセラン、ラミーロ!

(小姓、下手の脇扉から来る)

どうした。ここはどうなっている?

小姓 陛下、この宮殿は蛻とがけの殻です。いま現在ここで生きている人間は
 陛下ご自身とわたしのみです。

王 妃は?

小姓 お車で宮殿を立ち去られました。

王 もうトレドに戻るのか。

小姓 存じません。ただ、ご領主がたは——

王 どの領主たちだ?

小姓 ご家臣のかたがたです。皆さまはうち揃って馬に飛び乗り、トレ
 ドでなく、陛下ご自身がおいでになられた道を取って行かれました。

王 何、レティーロか? 明いているのに暗い目から鱗が落ちてゆく。

殺人だ。連中はラーエルを殺しに行くのだ。馬だ、馬だ!

小姓 陛下の馬は負傷しましたから、御自らお命じになられたとお
 り——

王 ならばほかのを、ガルセランのでも、おまえのでも。

小姓 馬はすべて連れ去られてしまいました。連れて行き、野に放した
 かもしれません。厩も館同様、空です。

王 連中、わたしを出し抜いたと思っているな。行け、馬を探してこい。

農耕馬でもよい、わが復讐心が馬に翼を貸すであろう。だが、事が起
 こつたら。——ならば神よ、わたしが暴君としてでなく、人間として
 犯罪と犯罪者を罰するようお取り計らいください。馬を探してこい。
 さもなくば分かっているだろうな、おまえも皆と同じく、その首で代
 償を支払うのだ。(扉のところまで立ち止まって、激しい身ぶりをして)
 皆だ! (急いで立ち去る)

(幕が降りる)

第五幕

レティーロ城の広間、中央扉がひとつ、脇扉がふたつある。いたるところに破壊の跡。下手前方に化粧台がひっくり返されており、化粧道具が散乱している。上手後方には同様に投げ倒された机、その上に絵が一枚、破れて半ば額から飛び出ている。部屋の中央に椅子がひとつ。暗い。外から、中央の壁の背後から、人の声や足音や武器を鳴らす音。そしてようやく、

外から もうよい。

合図が鳴ったぞ。

馬に乗れ。

(声と足音が遠ざかる。間)

(それから、イーザクが上手の脇扉から入ってくる。頭の上に絨緞をかぶせて後ろに引きずっている。しばらくしてそれを落とす)

イーザク 行っちゃったか？——何も聞こえん。(後ずさりして) いや聞こえる。——いや、やっぱり聞こえん。連中がこの城を盗賊みたいに家捜ししているあいだ、わしは隠れていた。床に丸くなって寝て、この覆いをおしの屋根にし、傘にしていた。だがどこに行こうか。——わしが蓄え、手に入れたものはとくに庭に穴掘って埋めといた。騒ぎが収まったらあとで取って来よう。——扉はどこだ？ どうやってわしの心を救ったもんか。(エステル、下手の扉から登場)

誰だ、来たのは。おしまいだ！

エステル どうさんなの？

イーザク ラーエルか？

エステル 何言ってるの？ ラーエルだって？ ただのエステルよ。

イーザク ただのとは何だ、ただのとは。おまえはたったひとりの娘なんだぞ。一番大事だからたったひとりなんだ。

エステル というより、たったひとりだから一番大事なんですよ。ねえ、とうさん、きょうの襲撃のこと、何も知らないの？ あの連中の怒りの矛先が全部、誰に向けられてたか知らないの？

イーザク 知らないし、知りたくもない。ラーエルは逃げおかせて無事だからな。おお、あいつは賢い。——わが父祖の神よ。なぜわしを、この哀れな年老いた男をお苦しめになるのです。なぜわしの子供たちの口を通して話しかけられるのです。しかしわしは信じない。そんなのないよ。うそだ。(舞台中央の椅子にくずおれ、頭を椅子に凭せかける)

エステル ならば徹底的に臆病な小心者根性を貫いて強くおなりなさいよ。でもあたしはそれとは違う小心者根性のことを、あたし自身が何をしたかを言おう。連中がやって来て、眠りから覚めたあたしは妹を助けようと、最後の遠い一番奥の部屋に急いで行った。すると、誰かの強い手に捕まると、床に投げつけられた。臆病者のあたしは失神してしまった。あたしの命を妹に捧げ、せめて一緒に死ぬべき時に。目が覚めたときには、事は終わっていた。どんな蘇生術も無駄だった。できたのは、泣いて髪をかきむしること。ほんものの臆病者だ。めめしいつたらない。

イーザク ああだこうだ言っても、わしは信じない。

エステル その椅子貸して、とうさん。(椅子を前のほうに動かす) 脚に力が入らないの。ここにおいて見張っていよう。(座る) もしかしたら、収穫後に落穂を拾って燃やすのは、やってみる値打ちがあると思って、戻ってきて、まだ残ってるのを殺す人がいるかもしれない。

イーザク (床に伏せて) いやだ。わしはいやだ。——おつ、誰か来たぞ。聞け。やつ、ひとりじゃない。——護ってくれ。おまえのところへ逃げよ

う。(エスターの椅子のところに逃げ、床にうずくまる)

エスター あなたを護ってあげましょう、母親のように。年老いたとうさんが子供に戻るのね。死神が来たら、子供なしで死ぬのよ。あたしは先に行つて、妹のあとを追いますから。

(中央扉に王が小姓とともに現れる。小姓は松明を持っている)

王 もっと先へ進んだものか？ 見ないうちにすでに分かっていることだよしとしようか？ 破壊され、蹂躪されて荒れ果てた城のすべてがそこから、わたしに耳もつんざかんばかりに叫ぶ。遅すぎた！ 惨いことになった！

そして、またまったく分かつていなくとも、おまえはその罪を負うのだ、恥ずべき優柔不断な者め。しかし、おまえは泣いているのだな。涙はうそをつかない。見る、わたしも泣いている。ただし怒りのためだが。飽くなき復讐欲のためだ。

松明をその輪に差して、村に行け。村人を集め、手当たり次第に武器になるものを持ってこの城に参上せよと命じる。わたし自らは、夜が明けてから書状をもって、労働と厳しい労苦の子供たるわが民を呼びよせよう。彼らの先頭に立ってわたしは復讐しに行き、家臣らの城をみな打ち壊してやる。あの、半分家来で半分は領主の連中、おのれ自身に奉仕して、主君にはわけ知り顔の物言いをする。支配者と被支配者の両方をやっている。おのが血管を流れる血と、おのれの刃で流す他人の血を誇りに思っているあの半陰陽どもを抹殺して復讐してやる。

灯りを置いて行け。わたしはここにひとり残り、わが復讐心の雛を孵す。(従者、松明を扉の横の輪に差し、退去する)

(前に一歩進んで)そこどうごめいているのは何だ。ここにまだ生きていくものが残っていたのか？ 答えよ。

イーザク 慈悲深い悪行さま、わしらをお見逃しください、高潔なる人殺しさま。

王 おまえか、老人。ラーエルがおまえの子だったなどと思い出させるな。わが心の中のラーエルの姿がしばむではないか。おまえはエスターだろう？

エスター あたしです、殿さま。

王 やられたのか？

エスター そうです。

王 城に入つて分かった。だから嘆くまい。よいか、樽は一杯だ。なお注ぎ足せば縁から流れ出て、中の毒を弱めてしまう。ラーエルがまだ生きていた時は離れようと思っていた。死んでしまつたいまとなつては、二度とわたしから離れてくれない。このわたしの胸に掛けてあるこのラーエルの肖像は刻み込まれ、内側に根を張ってしまう。というのも、ラーエルを殺したのはわたし自身なのではないか？ わたしと離れていても、子供のように遊び、自分は愉快、人には喜び、それがラーエルだ。もしや——それは、あの口に絶対ほかの唇が近づいてはならなかったし、厚かましい腕が——ラーエルは王ひとりのものだった。一度も見ていない時から、ラーエルはわたしのものだった。あの魅惑する力は玉座の権力者のものだったのだ。

イーザク ラーエルのことか？

エスター そう、とうさんの娘のことですよ。申し上げますが、胸の痛みが失くしたものの価値を倍にするように、殿さまは妹を過大評価しておられます。

王 そう思うか？ わたしは言おう、わたしたちはただの影に過ぎない。わ

たしもおまえも大勢の誰もかも。というのも、おまえが善良であるなら、そう教えられたからであり、わたしが名誉を重んじるなら、そういうものの方しかできないからであり、あの人殺しどもがそうだったのは、すでに父祖の代から必要とあらば人殺しになっていたからだ。世界は永遠のこだまに過ぎない。一粒から一粒しか取れない、それが世界の全收穫なのだ。しかしラーエルは歪んではいても真実だった。ラーエルのしたことはずべてラーエル自身の中から出てくるもので、突発的で、思いがけず、唯一無二のものであった。ラーエルに会ってから、自分が生きていると感じた。単調で憂鬱な毎日の中でラーエルのみがわたしには実も形も備えていた。

こんな話がある。アラビアの砂漠の砂に長いこと苦しみ、頭をかんかんに焼きながら太陽の暑さに耐えていた旅人が突然、花が咲き乱れる島に遭遇する。乾いた音をたてる海の波が泡立ち砕ける。花が咲いて、木陰が手招きする。草の息吹が柔らかく立ちのぼり、それが空の下にアーチを作って第二の空となる。たしかに、藪には蛇がとぐるを巻いていたり、猛獣もやはりのどの渇きに苦しみなながら、冷たい泉を見つたりした。それでも、歩き疲れていた旅人は歓声をあげ、命の水をがぶがぶすすって、豊かな草叢に身を投げ出す。

豊かな肉体、そう、まったく！ ラーエルを見たい。もう一度あの誇らしい姿かたちを。息を吸い込み、命を吐き出す口を、いまは永久に押し黙ったままだが、ひどい護りかただったとわたしを告発する口を見たい。エスター 殿さま、おやめください。起こってしまったことです、起こったことにおいでください。嘆くのはあたしたちにお任せください。殿さまは民から離れてはなりません。

王 そう思うか？ わたしが王だと分かっているだろうか？ ラーエルにば

かりでなく、わたしにも不正を働いたのだぞ。冠を戴いた日、いかなる犯罪にも正義と処罰を誓った。これは死ぬまで守り抜くつもりだ。そのためにはおのれを強くし、冷酷にならなければならない。というのも、人間にとつて気高く価値あるものはすべて、わたしの怒りを試金石にすることになるだろうから。わが少年期の思い出、男として初めて花嫁と出会ったこと、友情、感謝、優しさ、わが人生はすべてに、べもなく一体となり、武装して、わたしに対峙し、わたしにわたし自身と戦うよう挑発するだろう。だからわたしはまずわたし自身から離れなくてはならないのだ。ラーエルの肖像はここにもあそこにも、あの壁にもこの隅の隅にもどこに行っても目の前にあるが、これまでの美しさばかり見せてくれる。短所もあるがそれもまた魅力だ。ラーエルを見に行こう、壊され、傷つけられ、暴行を受けた姿を見て、その惨たらしさに打ち沈み、ラーエルの受けた痣をひとつひとつこの懐の肖像と引き比べ、人非人に対して人非人になることを学ぼう。（エスターが立ち上がっているの）何も言うな。そうするのだ。この松明に同行してもらおう。わたし自身のように燃え盛っているが、炎は破壊し破壊されるものだから、照らすためだけに。あの一番奥の部屋だな？ あそこわたしはよく――

エスター 妹がおります。いた部屋です。ずつとおります。

王 （松明を取って）行く手に血が見えるようだ。血に至る道だ。――おお、残酷な夜よ。（下手脇扉の中に入る）

イーザク 暗いな。

エスター たしかに不幸なおぞましい夜に包まれた暗闇だけど、夜が明けてきた。あそこまで足がいうことをきくかやってみよう。（窓辺に行き、カーテンを開く）日が昇る。青白い日の輝きが破壊の惨劇を、きのうときよりの違いを見てぞっとしている。（床に散らばっている化粧道具を指さし

て)あたしたちの幸せの残骸が転がっている。色とりどりのがらくた、そのためにあたしたちは、そうあたしたちが、自分のせいだと言っている殿さまではなく——あたしたちだけが妹を、とうさんの愚かな子を犠牲にしたのよ。起こる出来事はみな正しい。文句をつける人は自分自身と自分自身の愚かさを告発しているのだ。

イーザク (椅子に座っている)ここに座るぞ。王さまがおいでになったからには、あいつらもほかにやって来るどんなやつも怖くはない。

(中央扉が開く。マンリケとガルセラ、その後ろに自分の子供の手を引いている妃、幾人かの家臣、登場)

マンリケ ここに入って、一列に並ばれませ。われわれは国王に対して不正を働きました。善を望みはしたが正義は望まなかった。正義から逃げぬことにしましょう。

エスター (舞台の反対側で。ひっくり返っていた机をぐいと持ち上げて) 荒廃よ、秩序を保て！ あたしたちがたじろいでいるとか臆病だとか思わせてはならない。

王妃 あの異教徒がいる。

マンリケ よしとしましょう。彼らは、われわれをこれからおびやかすかもしれない苦難にすでに見舞われたのですから。よろしければ列にお並びください。

王妃 わたくしを先頭に行かせてください。一番罪が深いから。

マンリケ 違います、奥方さま。発言はされました。しかし実行する時になって拒まれ、見逃してやろうと要求されました、無理なことでしたが。というのも喫緊の問題がわれわれには命令となりましたゆえ。それに、われわれが敬してやまなやかたがた、王のお世継ぎやわれらが玉座の希望のかたがたに王の最初のお怒りが当たることも、わたしは望みません。

わたしが自らしたのです。確かに自ら手を下したわけではありませんが、指図し、はなはだ厳粛な哀れみをもって事に当たったのです。わたしが奥方さまの前にまいます。そして倅よ、おまえも手を貸さなかったにしても妨げはしなかったことの責任を男としてとる勇氣はあるか。そうすれば埋め合わせをしようと努めたことと、こちら側に戻ってきたこと自体が罪となるが。

ガルセラ 覚悟はできております。父上と並んで、王の最初の怒りをぶつけていただきます。

エスター (彼らに呼びかけて) そのあなたかたがた、皆、人殺しだからどんな死罪や処罰にも値するけれど、禍はもうたつぷり起こってしまいました。あたしは惨たらしいことがもつと増えるのは望みませんが。王さまがあの部屋の前にお怒りになります。その前にもう激しくお怒りでしたが、妹を見たら王さまはなお新たにお怒りになるでしょう。そこにおいでの方さまとお子さまがかわいそう。半分は無罪で、半分だけ有罪ですからね。だからまだ時間があるうちにお逃げください。仇を討とうとするかたに会わぬよう。あのかたは人を裁くにはまだ熱すぎますから。

マンリケ 女、われわれはキリスト教徒だ。

エスター いかにも、そのお手本を見せてくれました。妹こそ褒むべきユダヤ人です、お分かりにならないでしょうか。

マンリケ われわれはキリスト教徒として犯した罪を進んで引き受け、贖うことも覚悟している。皆、剣をはずされよ。ここにわたしの剣を置く。武装していれば、防御することになる。われわれはこの人数で謙虚さを武器に闘うのだ。罪を分かち合い、しかもそれぞれが罪のすべてを負うのだ。(全員、剣をマンリケの前に置いている)では待つとしよう。それより誰か王をせかしてはくれまいか。国の大事が、どのようにしてであれ、王が

自制されることを要求しているのだ。たとえ性急すぎる行動にわれわれが犠牲となり、後悔しようとも。倅よ、おまえが行け。

ガルセラシ (数歩進んでから、振り返って) ごらんください、国王が。
(王、脇の部屋から飛び出してくる。一三歩歩いてから、扉のほうをじつと見る)

王妃 おお、神よ。

マンリケ 奥方さま、お静かに。

(王、前のほうに行く。腕組みをして、老イーザクの前で立ち止まる。イーザクは安楽椅子の中でうたた寝している様子。王、それから舞台前方に行く)

エスター (父に) 見て、敵が震えている。嬉しい？ あたしは嬉しくない。死んだ妹が目覚めはしないから。

(王、舞台前方で自分の両手を眺め、清めるように一方の手でもう一方の手をなでる。それから上体もなでる。最後に首に手をやり、両手を首の周りで動かす。この最後の、首に手をあてた状態をなお続けて立ちつくし、すわった目でぼんやり前を見やっている)

マンリケ 国王陛下！ 殿！

王 (びくつとして) おまえか。よい時に来た。ちょうど探していたところだ。皆の者も。手間を省かせてくれたな。(彼らの前に歩いて行き、怒りの目つきで見つめる)

マンリケ (床に置かれている武器を指さし) われわれはわが身を護る武器を置き――

王 剣が置いてあるな。わたしを殺しに来たのか。ならば仕事を終わらせろ。

さあ。(服を開く)

王妃 もう掛けていらっしやらない！

王 美しい人、何のことだ。

王妃 よこしまな肖像が首から外されている。

王 取りに行こう。(脇扉のほうに一三歩歩いて、立ち止まる)

王妃 神よ、いまなお。

マンリケ 殿、われわれはどれほどの罪を犯したか、存じております。とりわけ、殿ご自身とその高潔なお心を信頼して、殿が元のご自身にお戻りになることに対して。しかし時がわれわれ以上に緊迫しております。国は揺さぶられております。国境で敵が、防衛し抵抗してみると挑発しているのです。

王 敵は懲らしめなくてはならない、であろう？ その警告は正しい。わたしも敵に取り巻かれているからな。おい、ガルセラシ。

ガルセラシ 殿、お呼びでしようか。

王 呼んだ。おまえはわたしを裏切ったが、友であった。こちらに來い。あの女のことをどう思う？ つまり――おまえが殺す手伝いをした――そのことはもう少しあつた。まだ生きていたとき、あの女のことをどう思っていた？

ガルセラシ あの女は美しゅうございました。

王 そうか。ほかには？

ガルセラシ 気まぐれで軽率、悪意に満ちておりました。

王 それを、まだ時間があつたときは黙っていたのか？

ガルセラシ 申しました。

王 わたしが信じなかったのか？ どうしてそういうことになったのか、申してみよ。

ガルセラシ 奥方さまは、魔法だとか推察あそばされました。

王 それは迷信というものだ。こうだとまず予め信じたことをあとから信じ

込んでしまう。

ガルセラン 部分的にはもちろんやはり自然でもありましたが。

王 結局は許可されたもののみが自然なことになるのだ。わたしは温厚で公平な王ではなかったか。わが民とすべての家臣の偶像であった。何も考えしていなかったわけでもないし、何事にも見る目がなかったわけでもない。あの娘は美しくなくなったと言おう。

ガルセラン 何とおっしゃられます。

王 頬と顎と口に陰険な皺があり、火のような眼差しに窺うようなところがあって、あの美しさを毒し歪めていた。眺めて比較した。怒りを増幅させようと、あの部屋に足を踏み入れた時は、激怒の気持ちが高まるのが半ば不安だった。だが予期していたのとは違うことになった。わたしの目に浮かんできたのは、この間までの豊かな思いではなく、妻と子と民だった。と同時に女の顔が歪んでゆき、腕がわたしを掴もうとして動くように思われた。そこでわたしは肖像を女のほうに、墓穴はかあなに投げ捨て、見てのとおり、ここに戻って来て、ゾクツとしているのだ。しかしもう行け。おまえはわたしを裏切ったのだから。おまえたちを罰せねばならないのは残念と言いたいくらいだ。父親やほかの者たちの中に入れ。区別はない、おまえたちはみな有罪だから。

マンリケ (強い声で) 陛下も、では？

王 (しばらくして) この男の言うとおり、わたしもだ。しかし、哀れなわが国よ、誰も純粹でなく、そこらじゅう犯罪者ばかりの時、この世界とは何であろう。だがここに息子がいる。われわれの真ん中に来い。おまえをこの国の守護神にしよう。そうすれば高き審判者もわれわれを赦してくださるのではなからうか。ドニヤ・クララ、この子の手を引いてやってくれ。幸運により、おまえはきょうの日までとらわれのない心で生き続けること

を許されてきたのだから。おまえは、われわれの中に純粹無垢な心を導き入れるのいうってつけだ。だが待て。ここに母がいる。彼女の行為は、子どものためを思っていたことだ。赦されることだ。(王妃が進み出て、ひざまずくので) マドンナよ、わたしを罰するか。そなたに対してわたしはどう振舞ったらよいか教えてくれ。カステイーリヤの諸侯よ、見てくれ。これがおまえたちの王だ。摂政はこの母だ。わたしは息子の傭兵隊長にすぎない。というのも、巡礼の者が十字架の印をつけて贖罪のためにエルサレムに向かうように、わたしはおのが汚点を意識しつつ、遠くアフリカから来て国境付近でわが民と静かなわが国を脅かしている異教徒と戦うために、おまえたちを指揮するのだから。それからふたたび戻って来て、望むらくは勝者としてだが、戻って来た時、わたしが、この度のことで損なった正義を護るのにふたたび相応しい者になったかどうか言ってもらおう。わたし同様、おまえたちひとりひとりに罰は下る。なぜなら、わたしのあとについて敵の軍勢が最も厚いところに行くからだ、おまえたち皆が、まず最初に。倒れた者は皆のために罪を贖ったことになる。こうしてわたしはおまえたちとわたしを罰する。ここで息子を、玉座の代わりに楯の上に乗せる。というのも、きょうからこの子がこの国の王であるから。いざ集まって、民の前に行こう。(楯が持って来られると) 女ふたりで子供に手を貸してやってくれ。この子の最初の玉座は滑りやすい——ふたつめも同様になる。ガルセラン、おまえはわたしのそばにいて、同じ軽率の責任を取らねばならない。一心同体のように力を合わせて戦おうではないか。そしてわたしと同様、おまえも身を清めたら、この物静かで淑やかな人が、おまえのことを心から愛し見つめるに足る男だと思いかもしれない。ドニヤ・クララ、ガルセランを改心させてやってくれ。だが頼む、美德というものに彼が敬意を払うばかりでなく、そう、優しさも感じられるようにし

てやってくれ。そうすれば多くの困難が防げるのだ。(遠くからラッパの音)聞こえたか？ われわれを呼んでいる。おまえたちを敵にして戦う援軍になるよう呼び出しておいたのだ。彼らはわれわれ皆の敵と戦う一助となる覚悟だ。国境をおびやかしているあの猛り狂ったムーア人を、わたしは傷つけ恥辱にまみれさせて故郷の乾いた荒地に送り返してやる。そうすることで、わが国は内に対しても外に対しても不正のない国でいられるのだ。進め！ 前へ！²² 神の御心にかなうなら勝利に向かつて。

(隊列はこの時までにはすでに整えられている。先頭に幾人かの家臣、次にふたりの女性に両側から手を取られて、楯の上に乗っている子供。それから残りの男たち。最後に王、信頼してガルセランに身を任せかけている) エスター (父のほうを向いて) 見た？ みんなもう朗らかに満足してしまった。もう未来の結婚の取り持ちまでして。あれが大物というものなのだ。仲直りの宴のために小物をひとり生贄にして、まだ血にまみれている手で握手し合う。

(舞台端中央に歩み出て)でもあたしは思いがった王に言ってあげよう。ご立派な物忘れしたままお行きなさい。——妹の思い出の棘がすり減って、かつて惹きつけられたものを振り捨てたから、妹の力から解放されたと思っているのだろう。戦いの日、あなたの頼りない軍隊が優勢な敵軍に震撼させられる時、純粋で強く罪のない心だけが危険にも脅威にも屈しない時、聞く耳を持たない天をあなたが見上げる時、その時、死なせてしまった生贄の姿が、あなたを惹きつけた豊かな美しさでなく、気に入らなかった歪み損なわれた姿で、あなたの戦き怖じける心の前に現れるだろう。その時、臍を噛み胸を叩きもするだろう。その時、あなたはトレドのユダヤ女の(とを思い起こすのだ。

(老人の肩に手をあてて) さあ、とうさん、行きましよう。向こうでやる

ことがありますよ。(脇扉を指さす)

イーザク (眠りから目覚めたように) だが、まずわしの金貨を探すぞ。エスター まだそんなことを考えている？ 嘆き苦しんでいるこの時に。それならい言った呪いは撤回しよう。それならとうさんも有罪よ、あたしも——それに妹も。あたしたちも彼ら同様、罪びとの列に並んでいるのだ。ではまあ、赦すことにしよう、あたしたちも神に赦されるように。(両腕を脇扉のほうに差し伸べる)

(幕が降りる)

翻訳にあたり、次の作品集を底本として用いた。

Franz Grillparzer: *Werke*, Band 3 (Dramen 1828-1851). Hrsg. von Helmut Bachmaier. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1987.

また、次の二種類の英訳本も参照した。

Franz Grillparzer: *The Jewess of Toledo*. Translated by George Henry Danton and Annina Periam Danton (Source: German Publication Society, New York, 1914), ed. Andrew Moore. Mondial, New York, 2009.

Franz Grillparzer: *The Jewess of Toledo*. Translated by Arthur Burkhardt. The Register Press, Yarmouth Port, Massachusetts, 1953.

注

1 表題も登場人物リストも原稿にはないが、一八二四年春ころの日記に『トレドのユダヤ女』悲劇」と書かれている。

Vgl. Franz Grillparzer: Werke, Bd. 3 (Dramen 1828-1851). Hrg. von Helmut Bachmair. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1987. S. 847.

2 アルフォンソ八世(一一五五—一一二四)。本作の時代はアラルコス(注5)の少し前であるから、王の実年齢は四十歳になるかならないのだが、ここではそれよりはるかに若く設定されている。父はサンチョ三世、母はナバラ王ガルシア六世の娘ブランカ。エレオノーレと一一七〇年、ブルゴスで結婚。ロペ・デ・ベーガの劇作品では、王がラケル(ラーエル)と出会ったのはエレオノーレと結婚した直後で十五歳の時だった。それから七年間ラケルとの生活が続いた(解題 243〜242頁参照)。

3 エレナー・オヴ・イングランド (Eleanor of England) 一一六二—一一二四、リチャード獅子心王の妹。原文では、アルフォンソは彼女をレオノーレ、レノーレとも呼ぶが、これは音節数を減らしてブランクヴァースのリズムを整えるための操作であり、それ以上の意味はないと考えられるので、本稿ではどの個所も「エレオノーレ」で統一した。

4 Rachel という女性名のドイツ語での標準発音はラーエルだが、一九九〇年のザルトブルク・フェスティバルにおけるトマス・ラングホフ (Thomas Langhoff) 演 出作品ではラヘル Rachel と発音された。ウルガタ聖書 (die Vulgata) での表記をドイツ語読みしたと思われる。

5 一一九五年、アルフォンソ八世はアラルコスの戦い(アラルコス近郊、新カステイリーヤの南の国境付近)でムーア人に撃退された。

6 新約聖書ヨハネの黙示録一四一八。創世記に書かれているバベルの塔ではない。

7 ソロモンの息子。彼を王位継承者と認めないイスラエルと交戦した。

8 ユダヤ人にとってキリスト教徒は不浄である。

9 フェルナンド二世。アルフォンソ七世の次男、アルフォンソ八世の父サンチョ三世の弟。アルフォンソ七世が一一五七年に死んだのち、サンチョ三世がカステイリーヤの王位を、フェルナンド二世がレオンの王位を継承したが、サンチョ三世は翌年死去し、アルフォンソ八世が跡を継いだ。

10 この科白は、ひとつ前の王の科白とともに、十九世紀の西欧の政治的課題であった政教分離を含意している。

11 この部分で作者が何を描いているかは、注1と同日の日記の記述に明かされている。「……彼〔王〕のすることは力強い。なぜなら、未だ力が及ばないために気後れするという思いをしたことがないからだ。彼が話すことは叡智ではあるが、本で得た叡智である。世界は未だ彼をその厳しい教えの弟子にしていなかった。すべてが順調な時に、かのユダヤ女が現れ、そのようなものがあることを彼がまだまったく知る由もなかった、そんな感覚がうごめき出す。官能である。王が庭園を妃と並んで歩き、廷臣や民衆に囲まれて、善意と叡智の言葉を交わしていた時、ユダヤ人を入れないようにと命じられている庭番に迫られてきて、その美しいユダヤ女が王の足元に倒れ伏す。彼女の腕が王の脚を抱え込み、豊満な胸が波打って彼の膝に押しつけられる。かくて——衝撃が走った。この膨れあがるフォルムの、この波打つ球形のイメージが(このイメージのため、その球形の記憶が彼の感覚に残る)彼から二

度と離れない。心の中にとつともない発酵。彼は自分の過去と現在の総力を挙げて、この新しい圧倒的な感情に抗う」(Grillparzer, a.a.O., S.847f.)

12 これは肌を見せる仕草である。

13 ラングホフの演出作品(注4)では、ここでエスターがラーエルの胸元を引き上げるが、ラーエルがそれを引き下げるといふ動作を二度繰り返している。つまり「こどもラーエルが王に肌を見せようとしているのである。」

14 このダッシュのあとは、本来なら「来たるべき戦いの日のことを！」のような科白だったはずだが、アルフォンソの調子がすっかり狂ってしまったことを表している。

15 「ラーエル Rahel」のあとに縮小語尾「ヒェン・chen」をつけている(Rahelchen)。およそ「ラーエルちゃん」とでもいうニュアンスになる。

16 ラーエルは自慰行為をしようと思っている。

17 「息子がふたりも奪われた」とは、ガルセランが二度も父の面目を失わせたということだろう。だとすれば一度目は、宮中の人々の前で息子が妃から疎んぜられたことを指している。

18 別の版では、「夢芝居 Traumspiel」が「悲劇 Trauerspiel」となっている。だが、王とラーエルの恋が「悲劇」だというのは理解しがたく、この恋が悲劇に終わると王が予見しているとも取りにくい。また韻律においても、Traum-spiel (二音節)ならブランクヴァースだが、Trau-er-spiel (三音節)とするこの行のみ抑揚格(ヤンブス)が六脚になり、ブランクヴァースが行われていないことになる。おそらく、「悲劇」と読むのは根拠がなく、生原稿を読んだ編集者が単にTrauをAeAと読み間違えたに過ぎないと思われる。

Vgl. Franz Grillparzer: Sämtliche Werke. Ausgewählte Briefe, Gespräche,

Berichte. Hrsg. von Peter Frank und Karl Pörnbacher. Bd. 2. München (Hanser) 1961, S. 483.

19 一八〇年、トレドでユダヤ人迫害があった。

20 ここで「正義」と訳した原語はRecht(解題238〜237頁参照)であり、参考にした二種類の英訳ではどちらも「掟law」と訳されている。たしかにそうしたほうが意味が通りやすいが、この文脈で成文法は考えられず、不文法の意味も含めて「正義」とする。この語の曖昧でいかがわしい使い方をマンリケがしているように見せるのが作者の意図だと訳者は考えるからである(解題240頁参照)。

21 原語はVerstand^{フエブレタント}、哲学用語として「悟性」と訳されるのが通例だが、会話にはなじまない。一般的には「知性」や「知力」などの訳語が当てられるが、「人間の意志のすべて」と等しいものとして「判断力」とする。

22 最初と最後にのみ王子を登場させることと、第一幕の終わりと同じ科白(9頁)をここで王に言わせることによって、その間に王という人間がいささかも学習せず、変わらなかったことを暗示する。

解題

一、はじめに

ここに訳出した悲劇『トレドのユダヤ女』（以下、『ユダヤ女』）は、フランツ・ Grillparzer（一七九一—一八七二）が一八一六年に作業を開始し、一八五一年に脱稿した作者最後の完成戯曲である。しかし日の目を見るのは、それからさらに二十年有余を経た作者の死後のことで、それまでこの作品は、『リブツサ』（一八四七／四八）と『ハプスブルク家の兄弟争い』（以下、『兄弟争い』、一八四八）というふたつの悲劇とともに筐底に秘されていたのである。

Grillparzer は一八三八年に『嘘つきに禍あれ！』の上演が大失敗に終わったのを契機に演劇界から離れ、以後、生涯、新作の完成戯曲の発表を拒んだ（新作の戯曲断片と旧作は上演された）。その一因として、作者が再度の失敗を危惧していたこともある。だがわれわれにとつてそれより重要な要因は、生前に発表する意思が作者になかったこと、そして三作品とも発表しづらい内容を含んでいたことである。言い換えれば、発表しないことにしたからこそ、検閲などの社会的束縛や世評を顧慮することなくフリーハンドで書くことができた作品なのだ。『リブツサ』は、男性社会による歴史のひずみを告発する。『兄弟争い』は、三十年戦争に至る十七世紀初頭の歴史に仮託して十九世紀においてはいかなる進歩も肯定できず、未来も信じられないことを暗示する。

『ユダヤ女』ではどうか。まず何よりもユダヤ人問題がテーマとして正面

から取り上げられていることである。Grillparzer 作品では、ロペ・デ・ベーガの戯曲から取った題名に「ユダヤ」と記されていることと、舞台の最初と最後はユダヤ人しか登場させないことからだけでも、ユダヤ人問題が大きいテーマであることは明瞭である。一神教の原宗教であるユダヤ教に対する尊敬の念や反ユダヤの集団心理が語られる。また、ユダヤ人の少数民族社会に關しては、孤立状態から脱して非ユダヤ人の多数社会へ入り込み、混血するまでに同化するか、それとも自主規制して種を存続させるかという課題が提示されている¹⁾。

そしてもうひとつ、第一幕においてアルフォンソは、ラーエルの性的魅力に否応なく引きずり込まれてこれまでの生き方を変えざるをえなくなる——この物語の進行に決定的な推進力を与えているものはエロスである。現代から見ればきわめて遠回しな表現によるものではあるが、Grillparzer はストリンドベリ、シュニッツラー、ヴェーデキントといった世紀転換期の劇作家に先駆けて、エロスの破壊力を作品化したのである。

ここで本作に用いられている技巧について簡単に説明をしておく。全編、韻文で書かれているが、形式は三人のユダヤ人による第一幕冒頭の部分のみトロカイオス、それ以降は最後までブランクヴァースである。訳文は殆ど散文にしたが、冒頭のラーエルの歌と拙訳²⁵⁸頁（以下、本作からの引用は頁数のみ記す）のマンリケの科白のみ、詩の形にした（後者の原文には脚韻も施されている）。十九世紀末以降に多く用いられるようになる言い間違いや噛みあわない科白、空舞台（人物がいない状態の舞台）が、本作に散見される。また、間（ダッシュで示される）が非常に多いのも特徴的である。

なぜ、何を意図してこの作品が構想されたのか、換言すれば、作品には作者のどのような遺言が託されているのか、順を追って探ることにしたい。そこでまず、作品の成立事情から見てゆくことにしよう。

二、アルフォンソ八世をめぐる物語

アルフォンソ八世（訳注2）と美しいユダヤ女をめぐるのは、物語詩、小説、劇作品がいくつも書かれてきた。だが、王にユダヤ女の愛妾がいた史実はない。

『ユダヤ女』の作品世界にはまず、その土台として中世スペインの歴史がある。七一年に西ゴート王国がイスラム勢力（ウマイヤ朝）に滅ぼされて以来、イベリア半島ではキリスト教徒が彼ら（ムーア人）を半島から一掃するレコンキスタ（国土回復運動）の歴史が八百年近くにわたって続く。

劇の物語世界を構成するのは十二世紀後半のカステイリヤ王国である。アルフォンソの父王の死後、叔父のレオン国王フェルナンドが先王の遺言——アルフォンソは三歳の時から王位にあるが、十五歳になるまで各地の貴族はそれぞれの所領地を王に帰属させないこと——を盾に取り、カステイリヤの実権を掌握しようとするのだが、マンリケたち側近の奮闘により、アルフォンソは十歳で名実ともに権力の座に就く。また一一七〇年、十五歳の時、八歳のエレオノーレ（一一六二—一一二四）とブルゴスで結婚する。「わたしたちはついこの間まで子供だった。子供だったわたしたちはかつて結婚させられたが、そのあとも敬虔な子供のまま生きて来た」（257頁）。そして一一九五年に彼が率いるカステイリヤ軍は、アラルコスAlarcosの戦いでムーア人に壊滅的敗北を喫する（劇の終わりに王たちが出陣するのがこの戦いである）。これが劇作品の土台となる史実の要点だが、それから約三十年後、屈辱的大敗の弁明として、王が美しいユダヤ女に惑わされ、政務を七年間放棄したという内容の物語詩が作られた。この物語詩から様々に意匠を凝らした文学作品がいくつも書き継がれてゆくことになる。

三、ロペ・デ・ベーガ

グリパルツァーが『ユダヤ女』の執筆に際して参考にした基礎史料としては、マリアーナの『スペイン史』がある。しかし、作品化する上で最も刺激を受けたのは、スペイン黄金期の劇作家ロペ・デ・ベーガの『国王夫妻の和解、あるいは、トレドのユダヤ女(Las paces de los reyes, y la Judía de Toledo)』(一一六六)である。以下、あらすじを記す。

第一幕 一一六五—一六六年。十歳のアルフォンソはマンリケとエステバンの輔弼まひつにより自らが国王であることを宣言し、家臣に忠誠を求める。しかし、ロペ・デ・アレナスは先王サンチョの遺言に従い、アルフォンソが十五歳にならないうちは管轄する城砦を明け渡さないと言う。これに対してアルフォンソは兵を挙げ、ロペのスリタ城砦を攻め落とそうとする。その城は難攻不落であるが、ロペの信頼篤い従僕にして道化のドミンギーリョが王の側に寝返り、ロペを騙し討ちして殺害する。王は約束していた報酬を与えるが、加えてドミンギーリョの両眼を潰すよう命令する。

第二幕 一一七〇年。ガルセランがイランに国王の来歴を語る（ふたりとも王の側近だが、前者は王の幼なじみでもある）。王は、カステイリヤの実権をも篡奪しようと企む叔父でレオン国王のフェルナンドを討伐したあと、イングランドのリチャード獅子心王と十字軍遠征した。リチャードは、アルフォンソにその勇敢さゆえ、娘エレオノーレを妃にと差し出す⁴。スペインに戻り、ふたりはブルゴスで結婚し、きょう、ついにトレドにやって来た。夫妻は仲睦まじい……。

王とガルセランはタホ川に行く。王はそこで水浴しているラーエルを

見て、彼女に夢中になってしまふ。しかしラーエルの服を見て、ユダヤ人であることを知る。

妃は、国王が自分から離れてゆくことを憂える。王に宛てて愛の苦しみの手紙をひとり書いてみると、王が来てそれを読むが、彼は何もなしえない。また、忠臣から連隊を閲兵するよう要請されるが、王はそれを拒否してしまふ。

王はラーエルとの愛に走るか否か逡巡するが、情熱を抑えられない。「情熱が私から理性をすつかり奪った。破壊がはつきり目に見えるが、逃れることはできない。五感がわれわれに反乱を起こす時、いかなる意志も力を失ってしまうのだ」

(第二幕と第三幕の間にふたりが暮らした七年間の経過がある)

第三幕 一一七七年。家臣たちが王妃に個別に呼び出され、集まったところに、妃が喪服姿で登場する。妃は彼らに、ラーエルに王を奪われて七年が経ったこと、ラーエルが政治の実権を握っていること、ムーア人が各地に侵入し、破壊活動していることを嘆き、ラーエルの殺害を要求する。さもないと、息子を連れてイングランドに行くと言ふ。息子エンリケも激しく行動を迫る。ついに家臣は皆、囚われの王を解放しようと決心する。

召使いが偽りの用件を言い、王が町へ立ち去ったあと、ガルセランを除く他の家臣が来て、ラーエルを殺害する。だが、ラーエルは事切れる寸前にキリスト教への改宗を告白する。

王は復讐を誓うが、天使が現れて彼を戒める。王は悔い改め、ガルセランとともに聖母教会へ向かう。王妃は他の家臣らに、王に会って話すように説得される。だが、妃は、王がそこに来るとは知らずに、同じ教会に王子や家臣たちとともにやって来る。しばらくして王とガルセラン

も到着する。

王と妃は、互いに相手の存在に気づかず、薄暗い堂内でマリア像に向かってそれぞれ懺悔の祈りを始める。しばらくして互いに相手のことが分かり、またそれぞれ懺悔していることを知り、和解する。

グリルパルツァーがロペの作品から採り入れたものには、王の性格、幼年時代、教育、また王の民衆に対する態度、王と王妃の関係、年若い彼らの結婚が側近たちによって仕組まれたこと、ラーエル殺害を王妃の教唆によるものとしたことがある。またグリルパルツァーは、ラーエルを出すのが遅すぎると批判する一方、ロペの偏見のなさを称賛している。「(ロペは)かなりユダヤ女の側に立つており、ラーエルが暴行によって殺害される前にキリスト教への改宗を望むことで、観客のために、ユダヤ教徒という汚点を取り除いている。」(傍点引用者)

四、ユダヤ人問題

先に触れたとおり、『ユダヤ女』を論じる際にユダヤ人問題を避けて通ることにはできない。しかもユダヤを「汚点」と見るのは、中世と近代とを問わずヨーロッパ社会一般の通念だろう。ユダヤ人は殆ど不可触賤民と言ってよいほど忌み嫌われているのである。そう考えれば、『ユダヤ女』第二幕でガルセランが、「国境の戦士であるわたしたちがムーアの女に目移りしても当然でしょうが、ユダヤの女は——」(275頁)と冷笑するのも、また、第三幕で同じくガルセランが、王の顧問に納まっているイーザクを侮辱的に罵ることにもうなずける。

グリルパルツァーは共生社会の実現に向けて、社会に一石を投じるための

作品として、『ユダヤ女』の冒頭からラーエルという革命家に国家の中枢への闖入という禁を犯させるのである。一方、これを受ける、国家の中心にいる王は寛容で啓蒙主義的である。「おのれの信仰に彼ら〔ユダヤ人〕は心を砕くがよい、だが、わたしは彼らの行いに心を砕く」……「これから起こることを知っているのはわたしばかりであり、キリスト教徒でもユダヤ教徒でもない」（ともに279頁）という科白は、十九世紀の政治上の課題である政教分離を踏まえた言説である。だがこの劇では、その後、反ユダヤ主義という一般民衆の世論——作品中ではユダヤ人迫害——を背景にした守旧派が、闖入者の犠牲と排除によつて秩序を取り戻す。つまり、ラーエルが殺害されたあと、エスターが王に「嘆くのはあたしたちにお任せください。殿さまは民から離れてはなりません。」（251頁）と言うのは、解放と共生の実験が失敗に終わったことの承認なのである。

だが、ここで作品は終わらない。そして作品を締めくくるエスターの最後の一行に至つて、キリスト教徒もユダヤ人も同罪で、人間に皆変わりはなく、赦すことこそが肝要だ、と言っている。ユダヤ人問題が作者の最も重要な遺言とは考えられないのである。

五、個人と社会の相克

「シラーの歴史劇やクライストの『ホンブルク公子』と比べてみるとグリパルツァーの政治劇では、個人の運命は、人間の共生の問題よりも下位に押しやられている。つまり、個人の自己実現や自己確認は、正義と不正あるいは秩序と恣意という問題の背後に隠れてしまっているのである。」

ここで述べられているのは、クライストの『ホンブルク公子』（二八一—）を例に取れば、個人と社会の相克がどのように描かれているのか、というこ

とである。クライスト作品は曖昧さ（多義性）に溢れているためもあり、第二次世界大戦終戦の前と後とで、つまり社会体制の変貌に伴つて作品解釈が大きく変わっている。終戦までは、劇が軍国主義的な威勢のよい雄叫びで終わることも手伝っていると思われるが、この作品は国威発揚を意図して書かれたものであり、そのテーマは個人と社会の宥和だとされていた。宥和が実現するためには、主人公が反抗心と傲慢さを克服し、社会に適合できるまでに成長を遂げることが必要なのである。では戦後になってどう変わったか。規律違反による死刑宣告を受け、死の恐怖に怯えていた公子がそれを克服する。その後は人間の偉大さと人間の名誉という理想をのみ追い求め、規律違反の非を認めて従容と死に赴こうとする境地に至る。だが、こうして自己実現が果たせると思われた矢先に、公子は恩赦を受けて処刑を免れ、代わつて次の戦闘に加わるよう命じられる、社会に適合できそうにも拘らず——これを、一九七〇年以降は、個人の名誉の追求と国家理性^{（National Reason）}の遂行とは相容れない、と考えるようになったのである。クライストのもうひとつのいわゆる愛国劇『ヘルマンの戦い』を一九八二年に演出したクラウス・パイマンは『ホンブルク公子』はプロイセン将兵の鍛練に関する作品ではなく、プロイセン国家を引き裂くことに関する作品です¹⁰とまで断じている¹¹。

『ユダヤ女』では、第一幕でアルフォンソが自分の生い立ちを語り、ラーエルの虜となつたあと、そうなった原因を第三幕でガルセラが嘆くことから分かる通り、この劇は人間の生き方をもうひとつのテーマにしている。しかし、『ユダヤ女』を個人と社会の関係という観点から読み解こうとすると、奇妙なことにこの作品が個人の内面の問題や自己実現をどのようにして論じているのか、構造が簡単には見えてこない。あらずしは明らかである。ムーア人との戦闘を間近に控えたカステイリヤ王国の国王が国家の最高責任者であるにも拘らず、世慣れていないため手もなくユダヤ女の色香に惑

わされる。王は彼女をわがものとし、政務を放棄してしまう。だが時を経て、時局が差し迫って猶予がなくなつたために王を取り戻そうと、ついに王妃と国家の最高会議がユダヤ女の処刑を決め、実行する。王は、いったんは報復を決意するが、暗殺によって顔の歪んだ死者を見ておののき、王妃と家臣の許に戻る。自らの罪科を自覚して退位し、息子を王位に就かせる。妃を摂政とし、自分は傭兵隊長となつて家臣たちとともに戦地に赴く。終幕のエスターの独壇場を除き、このように出来事の経過を略述すると、先述した『ホンブルク公子』の一九四五年までの解釈が当てはまる。つまりこの作品は、王が自分の犯した過ちを悔い改め、社会に求められる役割を認識し遂行するまでに成長する物語である。ラーエルとの愛の生活は国家理性から見れば、個人が克服すべき障壁でしかなかったということになる¹²。

しかも両作品ともまったく違う解釈が成り立つように終幕に仕掛けがなされている。『ホンブルク公子』の最終行は《全員》による「ブランデンブルクの敵はひとり残らず打ち倒せ！」という勇壮な雄叫びである。だがこの声に自己実現を阻止された公子が和するか否か、それによって作品解釈は百八十度変わってしまう。『ユダヤ女』では、少なくとも表面上は王が家臣らとともに嬉々として戦場に向かう点で演出を変更すれば作品を歪曲することになってしまうだろう。しかし、これを王の成長と見るか、あるいは自己実現（後述）に失敗して、それでも生き続けることを余儀なくされる人生の悲惨と捉えるか、どちらも可能だろう。

ところで、この作品での国家理性とは何か。キリスト教共同体において信奉すべきものは、マンリケの科白にある「神の御言葉、神自身が築かれた）聖なる秩序」（260頁）である。グリルパルツァー作品において重要な概念である「秩序」（ラテン語では *ordo*^{オールド}）とは、世界を維持するために永遠に有効な存在秩序を言う¹³。これに基づきつつ、政治が抛り所とするものが国家理

性だろう。だが、ラーエルの殺害を「王が拒まれたなら、血の正義が支配するのだ」（同）とマンリケは言う。つまり王は国の意思決定に際して無用で、王の諾否によらず、最高会議で決定したことが国家理性となる。この国家理性が犠牲として要求するのは、国を窮地に陥れた王ではなくラーエルである。アルフォンソに国務に戻らなくてはならないという意思があつたにも拘らず、ラーエルは身代わり山羊にされてしまう。そのような秩序はもはや、必然性も正当性もなく、神が作った聖なるものに基づくものとは考えられない。であるならばラーエルの命を要求するのは国家理性ではなく、「血の正義」である。だがこの正義という言葉は、第一幕で王も振りかざした（279頁）ように、古今東西、為政者が自己を都合よく正当化するために使われる概念である。つまり、この作品において王とその一党がそれぞれに、自分が正義だと信じ語るのは独りよがりの最悪の幻想と言つてよいだろう¹⁴。

六、ラーエルとは誰か

王がマンリケの振りかざす「国家理性」と対峙し、人間の理想に向かう意思を貫こうとするならば、あるいは『ホンブルク公子』に近い物語になつたかもしれない。だが愛欲に耽つている王の物語にそのような人生探求の形は釣り合わない。そこで、グリルパルツァーによって新たな命を吹き込まれたラーエルとは何者なのかを改めて確認しなければならない。なぜならこの作品の主人公はアルフォンソだが、タイトルロールのラーエルも——第三幕で早くも出番は終わるもの——単なる寵姫として片づけられない役を王に對して演じるからだ。

ラーエルは突如、王の前に現れて決して消せない強烈な印象を与え、うえに、王を手玉に取りさえする。たとえば第二幕での別れに際しての物言い

ある。

エスター 殿さま、あたしたちの感謝の気持ちをお受け取りください。

ラーエル あたしの方は、なしです。

王 よかろう、感謝はなしだ。

ラーエル あたしの感謝は取っておきます。

王 それはつまり、永遠になしということだ。

ラーエル あたしのほうがよく分かっています。

(269頁)

ラーエルがこう語るのは、王と自分の肖像画をすりかえたことを王は知らず、自分は知っているからで、筋のレベルではそれだけのことである。またユダヤ人問題の文脈では、彼女の科白はユダヤ人の改革派が、事態が自分たちに有利に動いていると感じている科白だと読めるように仕組まれている。だが一般には王位にある者に対して不遜であり、首を刎ねられても不思議ではないほど殆どありえない言葉だと言ってよいのではないか。しかもその点を差し引いても、なぜ王より自分のほうが、ふたりの関係が続くことを見とおしているか、と断言できるのか。

ラーエルの奇妙な科白の最たるものは、第三幕でガルセランに対して愛について語るくだりである。

あたしは恋をしたことがありません。でも恋ができるようになるかもしれません。もし誰かの胸の内にある狂気に触れて、それにあたしが満たされたら、あたしの心は震えるでしょう。それまでは、関係ないよその神殿にでもひざまずくように、恋の偶像崇拜のしきたりに従います。

(265頁)

これと、第三幕の幕切れにおいて王に対する愛を語るラーエルの最後の科白、

でもね、ねえさん、あたしそれでも本当に愛していたのよ。

(262頁)

は、字面を見ているかぎりでは矛盾しているとしか思えない。ではどう読み解けばよいのか。ラーエルの言う恋をするには、相手の胸の内にある「狂気」に触れなくてはならない。そういう恋とは官能とは無関係のものであるから、女に慣れているガルセランのような男には、彼の思い描くような通常の恋はしたことがないと言うのである(ただし少なくとも表向きは、官能の極致を狂気に喩えているとも読める)。逆に言えば、本当にアルフォンソを愛していたということは、アルフォンソの狂気に触れそうになったことがあると言っていることになる。相手の狂気に自分が満たされ、心が震える。「愛」ではなく、なぜ「狂気」なのか。二者が、自他の区別がなくなり溶けあうのは、人間が望みうる理想であるが、現実にはついに見果てぬ夢に終わる。ラーエルとアルフォンソは不可能な目標に向かっていそしんでいた。ならば、ラーエルとはこの世ならぬ存在でなくてはならない。筆者は、ラーエルはアルフォンソのアルター・エゴだと考える。ふたりの営みは、自己実現に向かってゆく行為であり、ラーエルの恋が成就するとき、完全な自己実現が達成されるはずである。

他の個所で確かめてみよう。第五幕でレティーロ城に来た王が、惨劇が行われたことをエスターに確かめたあとで、こう語る。「ほかの誰もラーエルの手に触れてはならなかったし、あの口に絶対ほかの唇が近づいてはならなかったし、厚かましい腕が――ラーエルは王ひとりのものだった。一度も見えない時から、ラーエルはわたしのものだった。あの魅惑する力は玉座の

権力者のものだったのだ」(252頁)。これを単にラーエル恋しさのあまりに発した過剰な言葉だと取るのが素直な読み方だろう。だが、この科白で言われているまさしくその言葉どおりのことが作者の含意だとしたら、最初から最後まで、会わないうちから徹頭徹尾、ラーエルがアルフォンソのためだけの存在だったとしたら、ラーエルはアルフォンソの中にのみ存在するアルター・エゴ——何から何まで正反対のもうひとりの自分——ということになる。先の、ラーエルが「あたしのほうがよく分かっています」と言うのも、アルター・エゴであればまったく当然で、「あなたの心の裏があたしには読めません」と言っているに等しい。あるいはまた、第三幕で王はラーエルとのいとなみを「夢芝居」(266頁)と言うが、それは夢のような生活の比喩的表現と見えて、実は言葉どおり、現実世界ではない夢の中(個人の内面)の物語なのである。その少しあとで今度はラーエルが、「あたし自身はどうせ一夜の夢でしかないのだから」(265頁)と語る。この科白も、どうせ自分の命など吹けば飛ぶほどの重みしかない、と語っていると見せつつ、言葉どおりに受け止めると、ラーエルはアルフォンソが見る刹那の夢と解せるのではないだろうか。

アルフォンソのラーエルとのいとなみは、歴史ロマンスのレベルでは快樂に溺れるものである。しかし「人生は夢||夢こそ人生」という考え方をすればそれは、オモテのアルフォンソがウラの分身とともに、あるべき自分とは何かを探求して、アイデンティティの確立を目指す内面世界の物語だったことになる。とすると、ふたたび『ホンブルク公子』の、今度は一九七〇年以降の解釈に近づくだろう。つまり、社会は自己実現を認めず、社会にとって不要かつ不都合なウラを殺す。オモテが探しにいった時、死んだウラの顔が歪んでいたのは、その場所——城の部屋であるのに「墓穴」(248頁)と呼ばれる。ただし、「一番奥」(251頁)の部屋である。墓穴の原語《Gruf¹⁶》には

「地下墓所、霊廟」という意味もある——が自分自身の心の最も奥深い場所
で、人間の意識がなくなり、この世と別れる場所だからであり、ウラの分身
はもはや現世の姿ではなくなりつつあったのだということになる¹⁵。

アルフォンソは、ホンブルク公子と同様、社会に適合できるようにするための学習などしなかった。生きのびるために妥協してオモテ人間に復帰し、これまでの経緯を忘れたとたん、朗らかになって幼い息子を王位に就かせる。皮肉にも彼は息子に、年相応の放埒な生き方が許されなかった彼自身の幼少年期を繰り返させる。「世界は永遠のこだまに過ぎない。一粒から一粒が取れる、それが世界の全収穫なのだ」(251頁)と自分自身が語ったとおりの行為であり、世界から逸脱している唯一無二の存在だったラーエルという真実を無に帰してしまふ。

七、むすび

現実は何も変わらない。現実世界に復帰したアルフォンソは戦場に向かう時、第一幕の終わりと同じ命令を発する「進め！ 前へ！」(276頁および247頁)。子供が作品の最初と最後にのみ登場するのも、世界は繰り返しばかりで「永遠のこだまに過ぎない」ことを表している。

起こったことはラーエルの殺害のみ、しかもラーエルは、王たちが和解するために、身代わり山羊にされてしまった。だがそれにも拘らず、もう一人のトレドのユダヤ女¹⁶ エスターは「起こる出来事はみな正しい。文句をつける人は自分自身と自分自身の愚かさを告発しているのだ」(250頁)と語る。人間の「正義・権利・法」——日本語や英語で三語に分かれるが、ドイツ語ではいずれも《Recht》、またエスターの科白の「正し」も《recht》——は、本来は権力者に都合のよい利己的な原理ではなく、人間が生きてゆくうえで

の厳しい基本原理だった¹⁷。人間は否応なくこれに従うしかない。ラーエルが殺されたのもこの世の習いに沿ったもので、理不尽と思えるにしても、人はそれを受け入れるしかない。

だがこのあと、劇は大詰めを迎えて形勢が二転三転する。ラーエルの遺骸を見て戻ってきた王が殺害者を告発するかと思えば、殺害者と和解して意気揚々と引き揚げてしまう。今度は、それを見たエスターが舞台端でひとり、観客に向かって王に対する糾弾の独白をする。だが一転、すべてが終わったあとも拝金主義を捨てられない父にあきれる。「ここまではおそらく誰でも難なく受けとめられるだろう。そして父の態度を受けて最後にもう一度逆転する。エスターは王に対する糾弾を撤回して、劇を締めくくる科白を語る。

それならとうさんも有罪よ、あたしも——それに妹も。あたしたちも彼ら同様、罪びとの列に並んでいるのだ。ではまあ、赦すことにしよう、あたしたちも神に赦されるように。

(247頁)

ここで「まあ (dem)」と訳したのは、「しかたない」と運命を甘受し、肩をすくめて諦める気持を表しているとする解釈¹⁸に従ったのだが、その解釈によれば、エスターの「赦すこと」とは諦めて運命に身を委ねることだと言う。だがそれだけだろうか。王を呪うことをやめ、少なくとも王の外見上の陽気な退場——その先には壊滅的敗北——とは裏腹の、哀れな人生を思いやれば、人間の究極の目標である内面の自己実現が阻まれた者のための、そして当然、われわれすべての人間のための、赦しをとおしての祈りぐもめると読めるのではないだろうか。

注

- 1 Vgl. Florian Krobb: „Bleib zurück, geh nicht in' Garten!“ Grillparzers *Jüdin von Toledo* als Traktat über die ‚Judenfrage‘. In: *Conditio Judaica*. Judenrollen. Darstellungsformen im europäischen Theater von der Restauration bis zur Zwischenkriegszeit. Hrsg. von Hans-Peter Bayerdörfer, Jens Malte Fischer, Frank Halbach. Tübingen (Niemeyer) 2008, S. 125-142, hier S. 142.
- 2 Padre Juan Mariana: *Historia de España*. 17に關して筆者は、グリルパルツァーがドイツ語で抜書きしたもののしか参照していない。Helmut Bachmaier (Hrsg.): Franz Grillparzer: Werke, Bd. 3. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1987. S. 851-858.
- 3 Ausgewählte Komödien von Lope de Vega III. *Die Jüdin von Toledo*, übersetzt von Wolfgang Würzbach. Wien (Anton Schroll) 1920.
邦訳はされていない。
- 4 正しくは、エレオノーレ (エレナー) はヘンリー二世の娘、リチャードの妹。また、アルフォンソは実際には十字軍に参加していない。
- 5 Vgl. Bachmaier, a.a.O., S. 863.
- 6 Ebd. S. 861.
- 7 Vgl. Krobb, a.a.O., S. 137.
- 8 Vgl. ebd. S. 141.
- 9 Alfred Doppler: *Der Herrscher, ein trüber Spiegel der absoluten Ordnung*. Franz Grillparzers Staatsdramen. In: Ders.: *Geschichte im Spiegel der Literatur. Aufsätze zur österreichischen Literatur des 19. und 20. Jahrhunderts*. Innsbruck (Institut für Germanistik) 1990. S. 17-30, hier S. 17. (以下)で言うグリルパルツァーの政治劇 (Staatsdrama) とは『オトカル王の幸運』

- と最期』『主君の忠実な下僕』『兄弟争い』といった歴史劇を指す。
- 10 Claus Peymann und Hans Joachim Kreutzer: Streitgespräch über Kleists *Hermannschlacht*. In: Kleist-Jahrbuch 1984, S. 77-97, hier S. 90.
- 11 『ホンブルク公子』に関しては次の拙論で詳述されている。阿部雄一「クライスト作『ホンブルク公子』——現代におけるその作品解釈の可能性をめぐって——」慶應義塾大学文学部編「藝文研究」第五〇号、一九八六、一九一—三六頁。
- 12 一九〇三年発行の「グリルパルツァー作品集」には次のような解説がある。「グリルパルツァーは参考文献から供された題材をすっかり自分の目的に合うように作りかえた。王を主人公にし、強い情熱の炎の中で一人前の男に成熟させるのだ。それゆえ彼のドラマは、彼のメルヒェン劇『夢こそ人生』やカルデロンの『人生は夢』クライストの『ホンブルク公子』に類する教育劇になったのである」Rudolf Franz (Hrsg.): Grillparzers Werke. 3. Bd. Leipzig, Wien (Bibliographisches Institut) o. J. [1903] (Meyers Klassiker-Ausgaben) S. 425.
- (筆者注——)「」で教育劇 (Erziehungsdrama) と訳したものは、主人公が試練を乗り越えて成長する内容の劇を意味するが、日本語で一般に「教育劇」といえば、ブレヒトの *Lehrstück* のような、問題を提起しその解決のために観客に思考を促す劇のことを言う)
- 13 Vgl. Bachmaier a.a.O., Bd. 2, S. 608.
- また、拙訳『兄弟争い』(開智国際大学「紀要」第一五号、281頁)においてはルードルフ二世が「」と語る。「秩序と言う言葉を知っているか。あの天高くに秩序は住み、その家もある。この下界の地には虚しい野望と混乱があるのみ」
- 14 Vgl. Dieter Borchmeyer: Franz Grillparzer: Die Jüdin von Toledo. In: Harro Müller-Michaels (Hrsg.): Deutsche Dramen. Interpretation zu Werken von der Aufklärung bis zur Gegenwart. Bd. 1. Königstein/Ts. (Athenäum) 1985 (2. Aufl.), S. 200-238, hier S. 229.
- 15 ラーエルがアルフォンソのアルター・エゴであるという考え方は次の拙論で詳述されている。
- Yuchi Abe: „Ein Traum nur einer Nacht“, den Alphons träumt. Über die mehrschichtige Struktur von Franz Grillparzers *Jüdin von Toledo*. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Bd. 10, Heft 1, 2011, S. 103-116. (＝日本独文学会編「ドイツ文学」第一四三号)
- 16 Heinz Pöltzer: Franz Grillparzer oder Das abgründige Biedermeier. Wien, München, Zürich (Molden) 1972, S. 350.
- 17 たとえば『兄弟争い』(注13)第三幕のルードルフ二世の言葉「人間の権利とは、友よ、飢えることと苦しむことなのだ」(263頁、強調原文)
- 18 Pöltzer ebd.